

Title	千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について：東関東地方縄文時代中期初頭段階の土器様相
Sub Title	On the potteries excavated from the shell mound of Yappe, Chiba Prefecture
Author	小林, 謙一 (Kobayashi, Kennichi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1989
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.58, No.2 (1989. 3) ,p.27(163)- 67(203)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19890300-0027">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19890300-0027</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について

— 東関東地方縄文時代中期初頭段階の土器様相 —

小林 謙 一

## 一、はじめに

八辺貝塚は、千葉県八日市場市に位置する。栗山川流域の考古学的調査の一環として、昭和三〇年に慶応義塾大学考古学研究室により調査された(清水一九五八)。遺跡は、栗山川支流の借当川支谷に面する台地北斜面上に位置し、三〇cmの厚さの混土貝層及びその下に七〇から八〇cmの純貝層が四〇度近い傾斜で堆積していた。貝層は約七m×四m程の範囲が残存し、小型のオキジミを主体に、カキ、アサリを伴い、他にハマグリ、チョウセンハマグリ、ダンペイキサゴなどが少量認められた。獣魚骨はシカ、イヌ、タヌキ、鹿角、エイの歯が検出されたが、極めて少ない。遺物は、貝層中より検出された多量

千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について

の土器の他、骨角器(骨製銚一、尖頭器一、装飾品二)、磨石、黒耀石製石器一<sup>(1)</sup>が出土している<sup>(2)</sup>。

これらのうち、中期初頭の土器は当初より「同時期における東北地方南部の土器の器形と類似する点」注目され、「全体として東北地方と交渉があり、さらに関東西部と東部(いわゆる五領ヶ台式と下小野式…筆者注)の中期初頭の様相が共に認められる」(鈴木一九八二)と指摘されている。しかし本資料は部分的な発表にとどまり、その後対比される例が少なかつたことも重なって東関東地方の当該期の様相は不明なまま今日にいたっている。今回、本塾考古学研究室の御好意により、八辺貝塚出土土器を再整理する機会を得たため、未発表の資料を含めて図示し、あわせて若干の私見を述べることとしたい。

## 二、出土土器の分類

本貝塚からは、縄文時代前期前葉と中期前葉の土器が出土している。その中心は、中期初頭に当たるものである。ここでは以下の一と一〇群に大別し、各々類別を行う。

一群 (126と141) 胎土に植物繊維を混入し、縄文を多用するもの。前期前葉に相当しよう。

二群 (143と149) 半裁竹管による平行沈線文を主要文様とするもの。前期中葉諸磯a式に相当する。

三群 平行沈線文、変形爪形文、貝殻文を施し、地文に撚糸文を有するもの。前期中と後葉浮島式土器に比定される。以下の一と四類に細分した(西村一九七七)。

一類 (150と152) 平行沈線文を主要文様要素とし、浮島I式に比定される。

二類 (153と161) 変形爪形文、波状貝殻文を有し、浮島II式に比定される。

三類 (162と165) 三角文を有し、浮島III式に比定される。

四類 (166と169) 波状貝殻文を縦位に施すものである。貝殻文は、アナダラ属貝殻腹縁による連続波状貝殻文と

する点、169を除き比較的密な間隔で並列させる点で上述の二類にみられる横位の波状貝殻文と同じ施文技法を有することから本群に含めたが、筆者の知見では類例を知らず、編年の位置づけに疑問を残す。

四群 (170と177) 170は流水文、171は擬縄文、175・177は変形爪形文、173は指頭圧痕が見られ、前期末葉興津式に相当する。

五群 (178と183) 縄文原体押圧が施されるもの。179は地文に羽状縄文を横位に施し、183はL無節結節縄文を施し口唇上及び口縁部にRL単節縄文原体を押圧する。安藤文一氏が粟島台式としたものに類似しよう(安藤一九七七)。東関東地方前期末葉に位置づけられる可能性が強い。

六群 西関東・中部地方の前期末葉の土器群に比定されるもの。筆者の山梨県小黒坂南遺跡群での分析により、以下の二類に区分した(小林一九八六)。

一類 (142) 地文に縄文を施しその上に結節浮線文を重段させる。筆者の中部・西関東地方前期末葉段階C群二類a種に相当し、十三菩提式土器群の系統に属するもので、小林編年の前期末葉段階III期に捉えられる。

二類 (184と186) 半裁竹管による半隆起伏の平行沈線を

集合させ、部分的に切削文を施すもの。小林の中部・西  
関東地方前期末葉段階A群二類a種に相当し、集合平行  
線文系土器群の系統に属するもので、小林編年の前期末  
葉段階IV期に捉えられる。

七群 平行線文、沈線文を主要文様要素とし、文様帯が  
構成されるもの。中期初頭に位置づけられ、西関東地方  
五領ヶ台式土器群に比定されるものを含む。一七類に  
細分した。

一類 竹管・ヘラ状工具による刺突文、三角状印刻文、  
沈線を主要文様要素とするもの。二種に細分した。

a種 (1, 2, 187, 189) 一列の刺突文、印刻文と一本  
の沈線が一組となり、横位の文様モチーフを描く。そ  
れが複数組で、胴部文様帯内に多段に重なることが多  
い。刺突、印刻は加工した竹管の端部を用い、三角状を  
呈すものが多い。一は、橋状把手を四単位配し、ヘラ刻  
み目を有す隆線が廻る。内傾する胴部中段にはヘラ状工  
具による細い波状沈線、さらにその下部に三角形印刻と  
沈線が三組横走する。胴部下段には無節縄文が縦位に施  
文される。2は、口唇直下に三角形印刻と沈線が一組横  
走し、指頭圧痕が施される。胴部には三角形印刻と沈線  
が重帯する。187は竹管による円形刺突が施され、L無節

縄文が縦位に施されている。

b種 (3, 190, 196) 竹管等による刺突文を主要文様要  
素とし、口縁部は横位、胴部は縦位に施文して柱状区画  
するもの。3, 191, 194は口唇上に竹管横位押圧を施す。

191, 192の刺突は棒状工具によるものである。3には補修  
孔が見られる。

二類 ヘラ状工具による細線文、細線状沈刻を主要文様  
要素とするもの。山口明氏の五領ヶ台式土器編年でのB  
型式(山口一九八〇)、今村啓爾氏の五領ヶ台I式(今  
村一九八五)に相当する。a, b種に細別した。

a種 (4, 197) 口縁部文様帯の沈線に沿って細線文を  
施すもの。4は橋状把手により、口縁部文様帯内を四単  
位に区画し、区画内にヘラ状工具による、末端渦状を呈  
す沈線文と三角形印刻を配する。胴部はR無節結節縄文  
の上に、沈線による「Y」字状文を垂下させ、柱状区画  
する。197は竹管による沈線及びヘラ状工具による三角形  
切削で王抱き三叉文を描出し、その間をヘラ状工具によ  
る細線状沈刻で充填する。

b種 (5, 207, 208) 口縁部上端に細線文を施すもの。  
a種と異なり細線状沈線も多くみられる。5は口縁部文  
様帯内に四単位の橋状把手を配する。口縁部文様帯内下

部の隆線には一部に瘤状突起が付され、胴部にはLR単節結節縄文が施される。207、208の口縁部文様帯には三角形印刻の交互刺突による「コ」の字状交互刺突文が横走り、竹管による沈線が並走する。口唇上には、207はヘラ刻み目、208は棒状工具による刺突が施される。

三類 口縁部文様帯に縦位の沈線を並列させるもの。以下の二種に細別される。

a種（6、7、209、210、213） 口縁部文様帯内全周にわたり、等密度な縦位の細線状沈線が並列されるもの。6の口縁肥厚部直下は不明確に輪積痕を残し、部分的に三角形印刻が施文される。7、213の口唇上には竹管が横位押圧され、7の口縁下部には指頭押圧を有する隆線が横走る。

b種（211、212） 口縁部の縦位沈線が部分的に並列され、口縁部文様帯が四区画されるもの。211はヘラ状工具による細線状の細い沈線が施文され、口唇上にはヘラ刻み目が施される。なお、214、215は胴部破片のため分類不能であるが、垂下する波状沈線が、三類にみられるものと類似し、三類土器の胴部と考えられる。

四類 沈線と竹管による刺突文の一組が、主要文様要素となるもの。以下の二種に細別される。

a種（8、198、201、205） 沈線と刺突が口縁に横走り、胴部には区画が用いられずに主として縄文帯、無文帯となるもの。8は口唇上に竹管横位押圧が施され、胴部にはL無節縄文が縦位に施文される。205はLR単節結節縄文が縦位に施され、横走沈線の下部に半裁竹管による「V」字状文が描出される。

b種（9、10、13、20、202、204、206、225、227、229） 胴部が柱状区画されるもの。9、10、20、225、227は口唇上に竹管横位押圧を有し、10、20には有孔の瘤状突起が単位見られる。13、20の胴部は三角形印刻交互刺突を持つ沈線で柱状区画されるが、口縁部及び胴部の沈線は半裁竹管による平行沈線が用いられている。203、204は、LR単節縄文の上に半裁竹管による平行沈線と刺突が組み合わさっている。225にはRL単節縄文が横位に施される。

五類（11、12、14、19、21、22、30、216、249、250） 無文の口縁部文様帯と、沈線、刺突文、「コ」の字状交互刺突文の横走する頸部及びその下部の胴部文様帯による文様帯構成を呈する。主要文様要素は竹管斜位刺突と沈線の一組、またはそれが「コ」の字状交互刺突となるものである。筆者の阿玉台式土器成立期A群I期に当たる

もので五領ケ台Ⅱ式新期に位置づけられる(小林一九八四)。七群中もっとも多くを占めている。12、16、18、21、30、216、218、220、223、228は、口唇上に竹管横位押圧を持つ。17、221、228、237の隆線上は竹管横位押圧、19には半裁竹管表面による爪形文が施される。地文として、11はL無節結節縄文を口縁部は横位、胴部は縦位に、22はLR単節縄文を横位、221はRL単節縄文を横位、237はRL単節結節縄文を横位、240はRL単節縄文を縦位に施している。なお、239の底面には網代痕が認められる。六類(24、29、246、258) 基本的な文様帯構成は五類に類するが、口縁部文様帯内に楕円形区画、窓枠状区画や横「S」字状文、玉抱き三又文が横帯するもの。筆者の勝坂式・阿玉台式土器群成立期の編年(小林一九八四)に於て五領ケ台式最末期に位置づけたA群Ⅱ期に相当する。246の口唇上はヘラ刻み目、25、29、247、251、253、254は竹管横位押圧、249はRL単節縄文が見られる。29の隆線上には縄文、246は竹管横位押圧、256はヘラ刻み目が施文される。地文として、24、27はL無節結節縄文、26は結節縄文、28は単節及び結節縄文、247、249はRL単節縄文、258はLR単節縄文、255はRL多条縄文、256はR無節縄文をもちいる。

千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について

七類 貝殻文を主要文様要素とするもの。以下の三種に細別される。

a種(31) アナダラ属貝類の貝殻腹縁の縦位押圧を、口縁は横列、胴部は縦位に並べ柱状区画とする。補修孔を有する。類例が横浜市池辺第4遺跡の第三群六類aに求められる。<sup>(4)</sup>

b種(32) ハマグリによる波状貝殻文を縦位に施し胴部の柱状区画とするもの。三群四類に類するが、七群に特徴づけられる柱状区画を呈することから、ここに位置づけた。

c種(259、261) ハマグリの貝殻腹縁を刺突するもの。259は口唇上にもハマグリによる刺突が施される。261の頸部を横走する隆線上には竹管横位押圧が施される。

八群 縄文または無文の装飾の少ない深鉢で、粗製土器の一群である。いわゆる下小野式土器を含む。

一類 沈線、隆線、突起を部分的に有し、半粗製土器と呼び得るもの。装飾によって以下に細分される。

a種(33、38、289、290) 刻み目を持つ隆線を持つもの。隆線上に33、289、290はヘラ刻み目、36は指頭圧痕、他はヘラ状工具による爪形文を有す。34、290の口唇上にはヘラ刻み目、36には竹管横位押圧が施される。36、290

はL無節繩文、289は結節繩文を地文としている。33は補修孔を有す。

b種 (23、39、40) 隆線を有すもの。39はLR単節繩文、40は単節繩文を各々隆線上にも施す。23は21、22に類した頸部屈曲の鉢状の器形を呈し、頸部に隆線を横走させ、L無節結節繩文を口縁部横位、胴部縦位に施す。これらのうち40は七群六類土器の胴部と類するが42の土器と同一地点の出土であり、胎土、焼成、地文がよく類似することから本群に含めた。

c種 (41、44、295、297) 「Y」字状、瘤状の突起を有するもの。43、295、297は口唇上に竹管横位押圧を、296は繩文原体押圧を施す。地文として43にはR無節結節繩文、42はRL単節繩文を口縁部横位、胴部縦位、44はL無節結節繩文を縦位、295、296は同横位に施文する。

c種 (45、46) 沈線を有すもの。45は肥厚した口縁直下に二列の沈線が横走し、地文としてLR単節繩文を口縁部横位、胴部縦位に施文する。46は胴部を二列の沈線垂下によって四単位に区画する。

二類 地文のみ、または無文のもの。

a種 全面に繩文が施されるもの。器形により五種に細別した。

a<sub>1</sub>種 (47、60、279、281、293、294) 直立またはやや外反した、直線的な立ち上がりを持つもの。47、50、53、60、297はL無節繩文、49、51、52、55、56、59、281、293はL無節結節繩文、54、57は結節部のみの回転施文、48はRL単節繩文、58はRL+R異条繩文、248はLR|R上には繩文原体が横位に、56、281は竹管が横位に、294は指頭による圧痕が押圧されている。これらは、繩文の施文方向により、以下の三タイプに区別される。

甲タイプ (47、49、51、53、54、57、59、60、281、293、294) 繩文を器面全体に横位に施すもの。

乙タイプ (55、56) 全面に縦位に施文するもの。

丙タイプ (50、52、58) 口縁直下は横位に、その下部は縦位に施文するもの。

a<sub>2</sub>種 (61、63、278、292) 頸部で屈曲し、口縁が外弯する器形を呈するもの。61はL無節繩文縦位、62はL無節結節繩文横位、63、292はL無節結節繩文縦位、278はRL単節繩文縦位を施す。292は波状口縁である。

a<sub>3</sub>種 (64、75、283) 口縁部がやや幅広く若干肥厚するか、下端に隆線を廻らし、いわゆる二重口縁状・折り返し口縁状を呈するもの。口唇上に、64は繩文原体、283は

部分的に竹管横位押圧を施す。65の胴部には竹管による波状モチーフが弱くラフに施されている。75、283はL無節縄文、65、66、68、73はL無節結節縄文、64はR無節結節縄文、64、67はL R単節結節縄文が施される。これらの施文方向には、a<sub>1</sub>種のみ甲タイプ(64、73、75)、乙タイプ(283)、丙タイプ(74)の4タイプ全てが同様に認められる。

a<sub>4</sub>種(76、79、280、285、288) 口唇に粘土紐を付加し、肥厚口縁を呈すもの。口唇上に、76、77、285は縄文原体、78はヘラ刻み目、79は竹管横位押圧を施す。287の口唇肥厚部下部には部分的に三角形印刻が施される。76、285はL無節縄文、286はR無節縄文、78、79はL無節結節縄文、287、288はR L単節縄文、77はR L異条縄文を、各々横位(甲タイプ)に施文している。

a<sub>5</sub>種(80、84) 口縁に輪積痕を残し、複数の段を呈するもの。83の口唇上には竹管横位押圧が施される。81、82、84はL無節結節縄文、83はR無節異条結節縄文、80はL無節縄文及びその原体末端の撚もどし部分が回転施文される。施文方向は、81は丙タイプ、他は甲タイプである。

b種(86) 全面に木端状工具によると思われる条線が

施されるもの。口唇上に瘤状突起を一個配し、竹管横位押圧を施す。

c種(85、300、305) 器面全面に指頭圧痕を残すもの。85、300、301、305は口縁部に輪積み痕を残し、300はさらに口縁部にL無節結節縄文を横位に施している。303の胴部にはヘラ状工具による爪形文が弱く垂下している。d種 無文の土器である。器形により五種に細分される。

d<sub>1</sub>種(87、103、284) a<sub>1</sub>種に準じた器形を呈す。94の口唇上にはハマグリ腹縁による刺突、92、248には竹管横位押圧が施され、284は口唇内面にも同様の押圧を有する。

d<sub>2</sub>種(104、110) a<sub>2</sub>種に準じた器形を持つ。106の口唇上には竹管横位押圧を施す。

d<sub>3</sub>種(111、115) a<sub>4</sub>種に準じた器形を呈す。114の口唇上には竹管横位押圧が施され、115の口唇上には瘤状突起が四単位配される。

d<sub>4</sub>種(116、119) a<sub>4</sub>種に準じた器形を呈するが、肥厚部に指頭圧痕を加えるもの。118、119は胴部にも輪積み痕を部分的に残している。

d<sub>5</sub>種(120、124) a<sub>5</sub>種に準じた器形を呈するもの。120は口唇上に二個一組の瘤状突起を四単位配する。121は頸部

を屈曲させる器形を呈す。

九群 (125、306、307) 浅鉢、台付鉢型土器である。306は台部であるが一对の孔を有している。このほか、内外面に赤彩を施した薄手の鉢と思われるものの破片もみられた。

一〇群 連続刺突文を特徴とするもので、阿玉台式土器群に相当する。小林一九八四の阿玉台式土器成立期の時期設定に準じて以下に細別した。

一類 (262、269) 竹管による沈線及び角押文状の連続刺突文が施される。拙稿のA群Ⅲ期に相当する。262、267はL無節縄文、265、266はRL単節縄文が回転施文、264はLR単節縄文原体を押圧している。262、269は波状口縁を呈すると思われ、267は裏面に三角形印刻を有し、竹管横位押圧を持つ瘤状突起を配する。口唇上に262は縄文、263、267、268は竹管横位押圧を施す。267は口縁部区画内に、小さな橋状把手を持つ。

二類 (270) 単列の角押文状連続刺突文を施す。拙稿のA群Ⅳ期に相当する。口唇上にも竹管文を施しており、阿玉台式土器古期の特徴をよく呈している。

三類 (271、276) 複列の角押文状連続刺突文を口縁部区画内に施すもの。拙稿のA群Ⅴ期に相当する。地文は無

文である。271は断面三角形隆線が波状に垂下し、275の隆線には指頭押圧が施される。

四類 (277) 半裁竹管裏面による二列一組の平行線状連続刺突文が施される。拙稿のA群Ⅵ期に相当する。隆線上にも同一工具による爪形文状の連続刺突文が施されている。

その他 (307、319) 形状不明な底部破片を一括した。ほとんどは七、八群に属すると思われる。307、318、319は上げ底状を呈し、309、310は胴部にL無節結節縄文、311はLR単節縄文を横位に施す。311、317の底面には網代痕が残存するが、多くは指頭調整によってなで消されている。

314、315は二本越え、一本潜り、一本送りと思われ、315は網代の大きさが一〇cm×八・四cmである。

土器片錘 (320、323) すべて胴部破片を用いたものである。特に周辺を加工、研磨、整形したものはみられず、破損した土器片にそのまま一对の切込みを施している。

320、321はもとの土器口縁に対し横方向、他は縦方向に切込みを持つ。320は二一g、321は一部欠損の可能性があるが現存四三g、322は半欠で現存二一g、323は一七gの重量を量る。

第1表は全出土資料分類別口縁部個体数(同一個体は

一と算定)、第2表は分類別縄文原体一覽(口縁、胴部による個体数)である。総数六二一個体のうち78%を八群が占め、次いで七群が14%である。こうした粗製土器優位の傾向は、下小野貝塚(江森他一九五〇)、雷貝塚(西村一九八三)においても認められている。

### 三、東関東地方中期初頭土器群の型式学的整理

近年、五領ケ台式土器群の編年学的研究は、山口明氏(山口一九七八、一九八〇)、今村啓爾氏(今村一九七二、一九八五)等によって大きな成果を挙げてきている。当該期の資料は住居跡出土資料が少ないこともあり、系統的な整理が主眼とされている。特に山口氏の論考では中部地方集合沈線文系土器と関東地方細線文系土器の系譜を、各々諸磯C式土器群、十三菩提式土器群に求め、空間的な分布を異にする伝統土器群として位置づけたことに意義がある。この点は、筆者も前期末葉段階の土器群分析の中で基本的に支持した所である(小林一九八六)。

しかしながら、五領ケ台式土器群における東・西関東の地域的差異については、東関東地方の資料の希薄性に

千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について

より、殆ど着目されなかった。今村氏は基本的な枠組みを「西関東地方を中心とする編年」と「東関東の編年」とに区分しながら、東関東地方の土器については「層位的出土例に乏しいだけでなく、一時期の単純な様相を示す資料も乏しい」ため「土器の型式変化と西関東の変遷に对照した上での整理にすぎない」としている。特に五領ケ台I式期においては、主に虚空蔵貝塚(大川他一九七八)例より「西関東のものとの相違点を指摘しがたい」とし「この時期には、浮島式と諸磯式といったような形での東関東と西関東のちがいは存在しない」と述べている。確かに虚空蔵貝塚例を始め、西関東地方のものによく類似する資料が東関東地方に散見されていることは確かである。しかし今村氏が五領ケ台II式の時期において、「西関東との違いがはっきりしてくる」と指摘している様に、五領ケ台式後半期には勝坂式・阿玉台式土器成立期の東・西関東の差異に連なる系統的区別が認められ(小林一九八四)、また五領ケ台式以前の前期末葉段階において大きな差異が存在している点からみて、五領ケ台式成立期においても、東関東地方に独自の土器群が展開していた可能性は大きい<sup>(5)</sup>。以上の点を、八辺貝塚出土資料を基に検討することを本稿の目的とする。

第1表 八辺遺跡出土土器分類別口縁部個体数一覧

分類	口縁	分類	口縁	分類	口縁
1	17	7-4-a	7	8-2-d <sub>1</sub>	132(11)
2	7	-b	10	-d <sub>2</sub>	9
3-1	0	-5	26(1)	-d <sub>3</sub>	65(3)
-2	8	-6	13	-d <sub>4</sub>	18(1)
-3	2	-7	2(1)	-d <sub>5</sub>	11
-4	1	7群 小計	83(2)	b種不明	77(2)
3群 小計	11	8-1-a	10(1)	b種 小計	314(17)
		-b	6	2類 小計	451(24)
4	2	-c	12(1)	8群 小計	484(26)
5	3	-d	4		
6-1	1	1類 小計	33(2)	9 群	3
-2	0	-2-a <sub>1</sub>	39(4)	7~9群 計	570(26)
1~6群 計	41	-a <sub>2</sub>	9		
		-a <sub>3</sub>	35	10-1	5
7-1-a	4	-a <sub>4</sub>	18(1)	-2	0
-b	9	-a <sub>5</sub>	6	-3	5
-2-a	2	a種不明	21(2)	-4	0
-b	3	a種 小計	128(7)	10群 計	10
-3-a	5	-b	1		
-b	2	-c	8	総 計	621

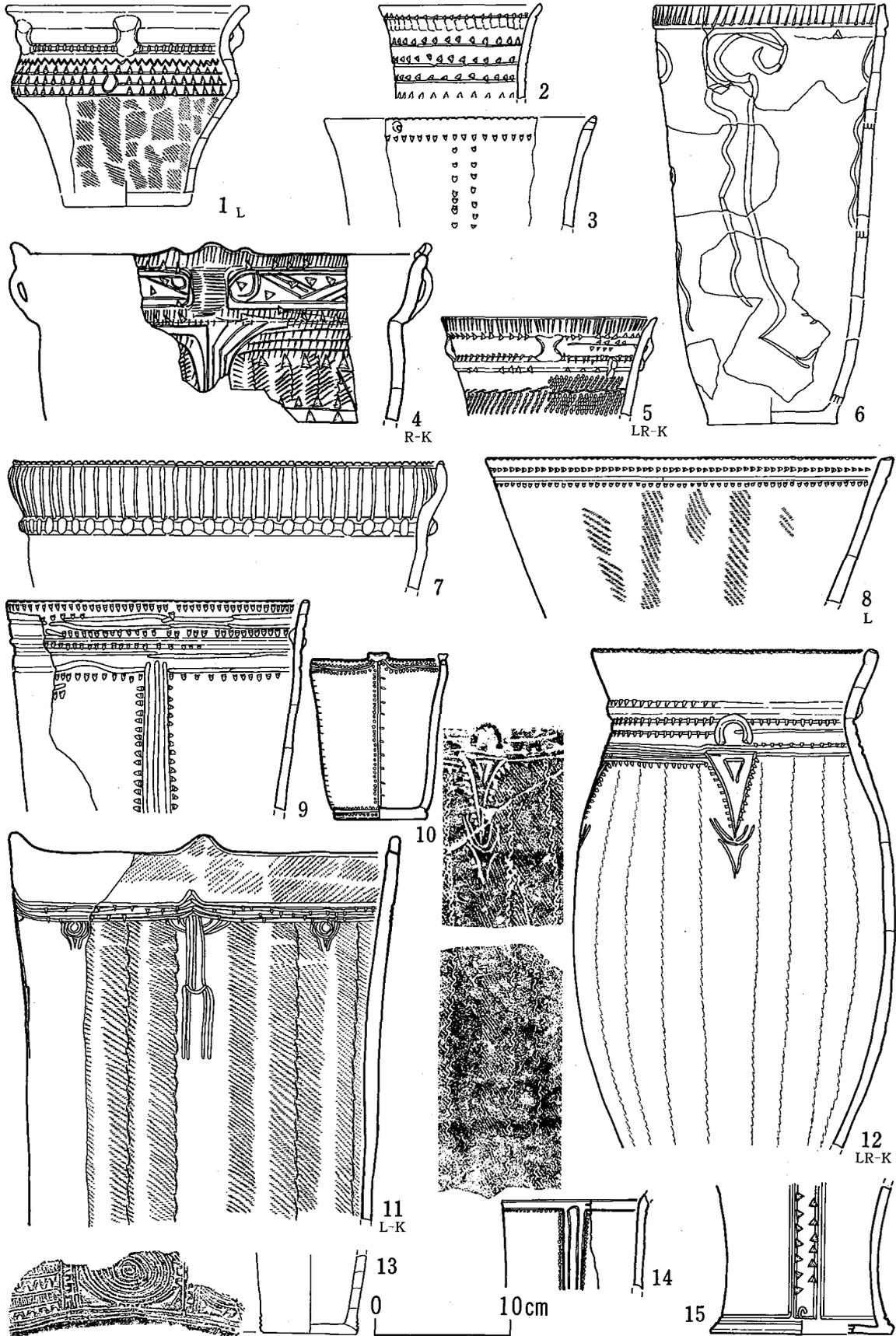
注) 分類は群一類一種, 口縁部個体数は, 同一個体は1と算定, 口唇部を残すものに限る。

0と記載のものは胴部破片のみの出土, ( )はうち, 補修孔を有すもの。

第2表 分類別縄文原体別一覧表

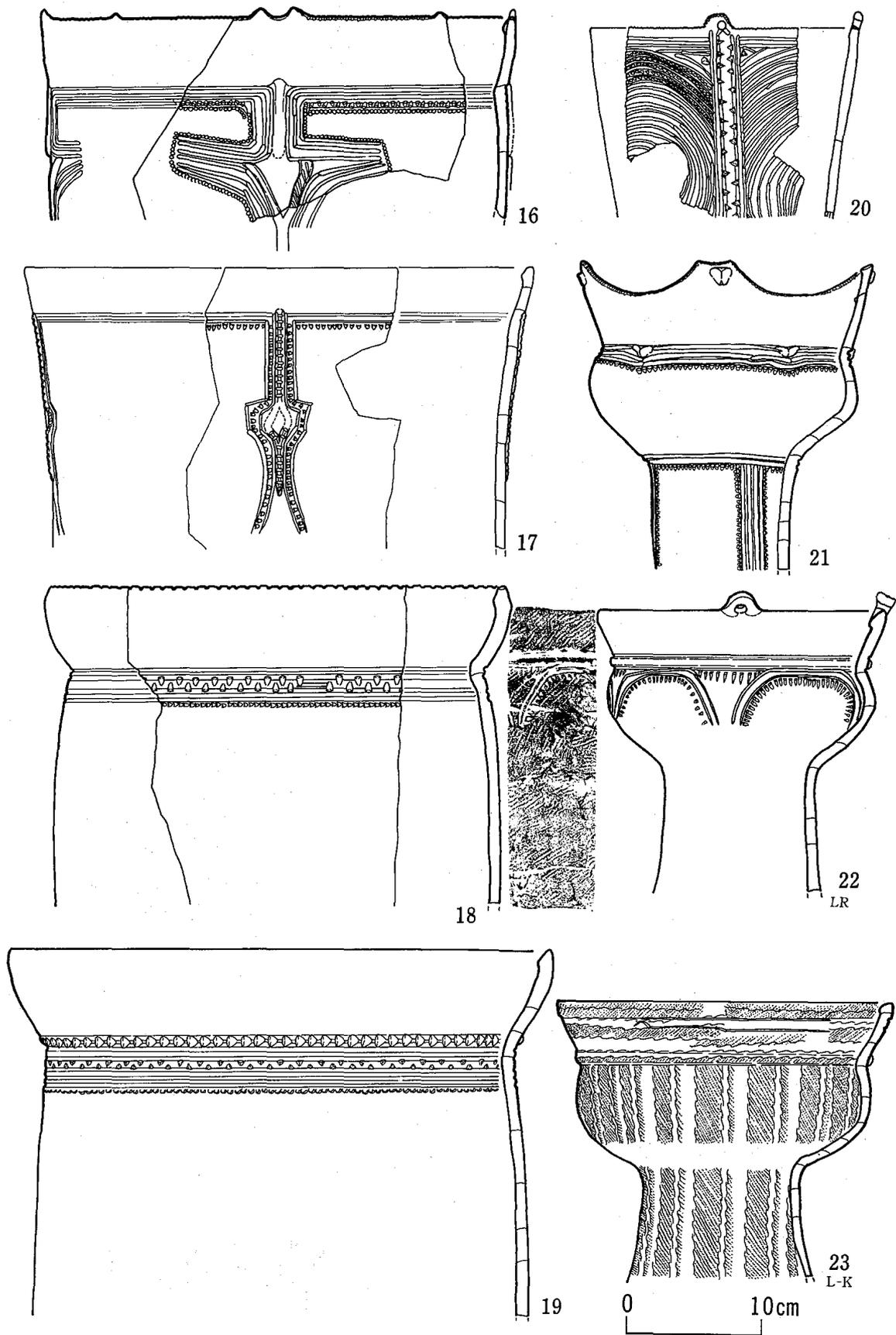
分類	無節	無結節	単節	単結節	異結節	異条	多条	多条	羽状	結節	小計 左・×・右	無単他	マ・マ・結節	無文	計	
	L・R	L・R	RL・LR	RL・LR	L・R	RL・LR	RL・LR	RL・LR	RL+LR	のみ						
7-1-a	2・										2・	2・	2・	2	4	
-2-a		・ 1									・	1・	・ 1		1	
-b				・ 1							・	1・	・ 1	1	2	
-4-a	1・			1・							2・	1・ 1・	2・	5	7	
-b			1・ 2								1・	・ 3・	3・	9	12	
-5	・ 1	2・	4・ 1	1・ 2							7・	・ 4	3・ 8・	6・ 5	51	62
-6		2・	3・ 2	・ 2			1・				6・	・ 4	2・ 7・ 1	6・ 4	16	26
8-1-a	3・									1	3・ 1・	3・	・ 1	3・ 1	5	9
-b		1・	2・	1・							3・	・ 1	1・ 3・	2・ 2		4
-c		4・ 1	1・								5・	・ 1	5・ 1・	1・ 5	2	8
-d	2・		・ 1								2・	・ 1	2・ 1・	3・	1	4
-2-a <sub>1</sub>	9・	14・ 2	3・	1・ 3		1・	・ 1		1	2	28・ 3・ 6	25・ 7・ 5	15・ 22		37	
-a <sub>2</sub>	2・	6・	2・								10・	・	8・ 2・	4・ 6	10	
-a <sub>3</sub>	6・	15・ 3	1・ 3	・ 6				・ 1			22・	・ 13	24・ 10・ 1	10・ 25	35	
-a <sub>4</sub>	6・ 1	6・	2・		・ 1	1・				1	15・ 1・ 2	13・ 2・ 3	10・ 8		18	
-a <sub>5</sub>	1・	3・					1・				5・	・	4・	・ 1	2・ 3	5
不明	5・	3・ 1		・ 1							8・	・ 2	8・ 1・	5・ 5	10	
-c				1・							1・	・	・ 1・	・ 1	指 8	9

注) 口縁部・胴部による最大個体数(同一個体は1と算定)。他に、無文のみの類として7-1-bが8, 7-3-aが5, 7-3-bが1個体出土。



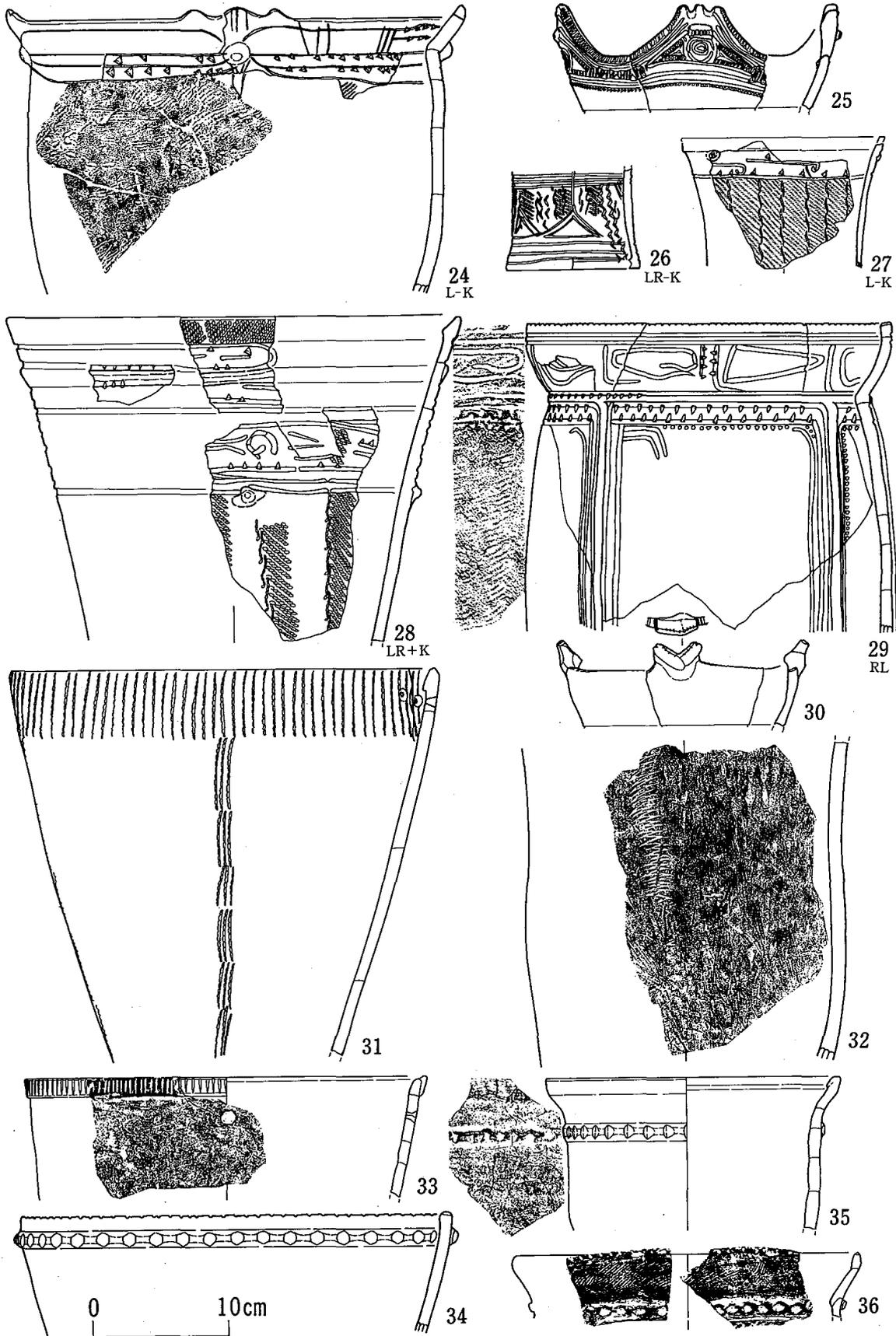
第1图 八边貝塚出土土器 (1/6)

千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について

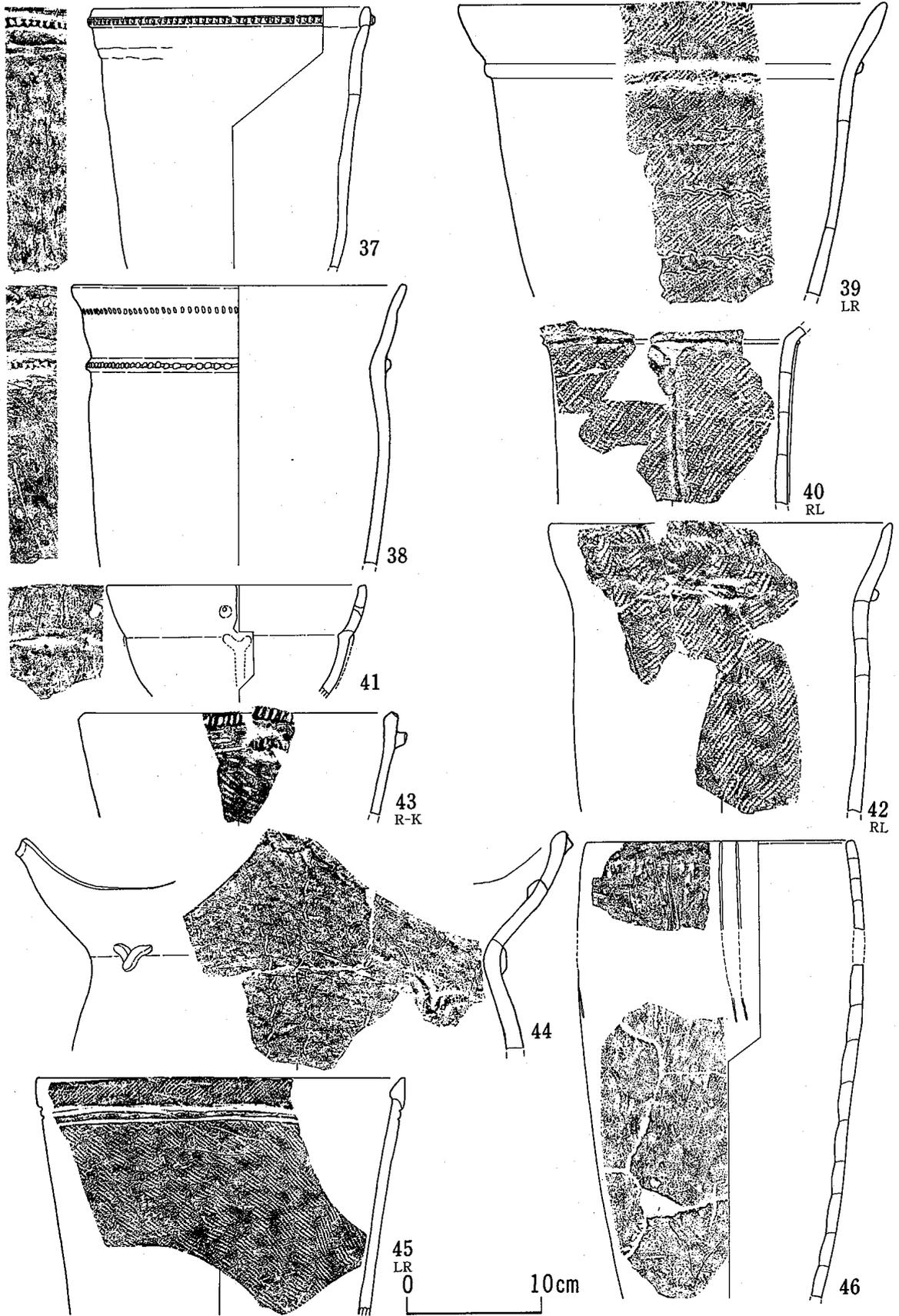


三九 (二七五)

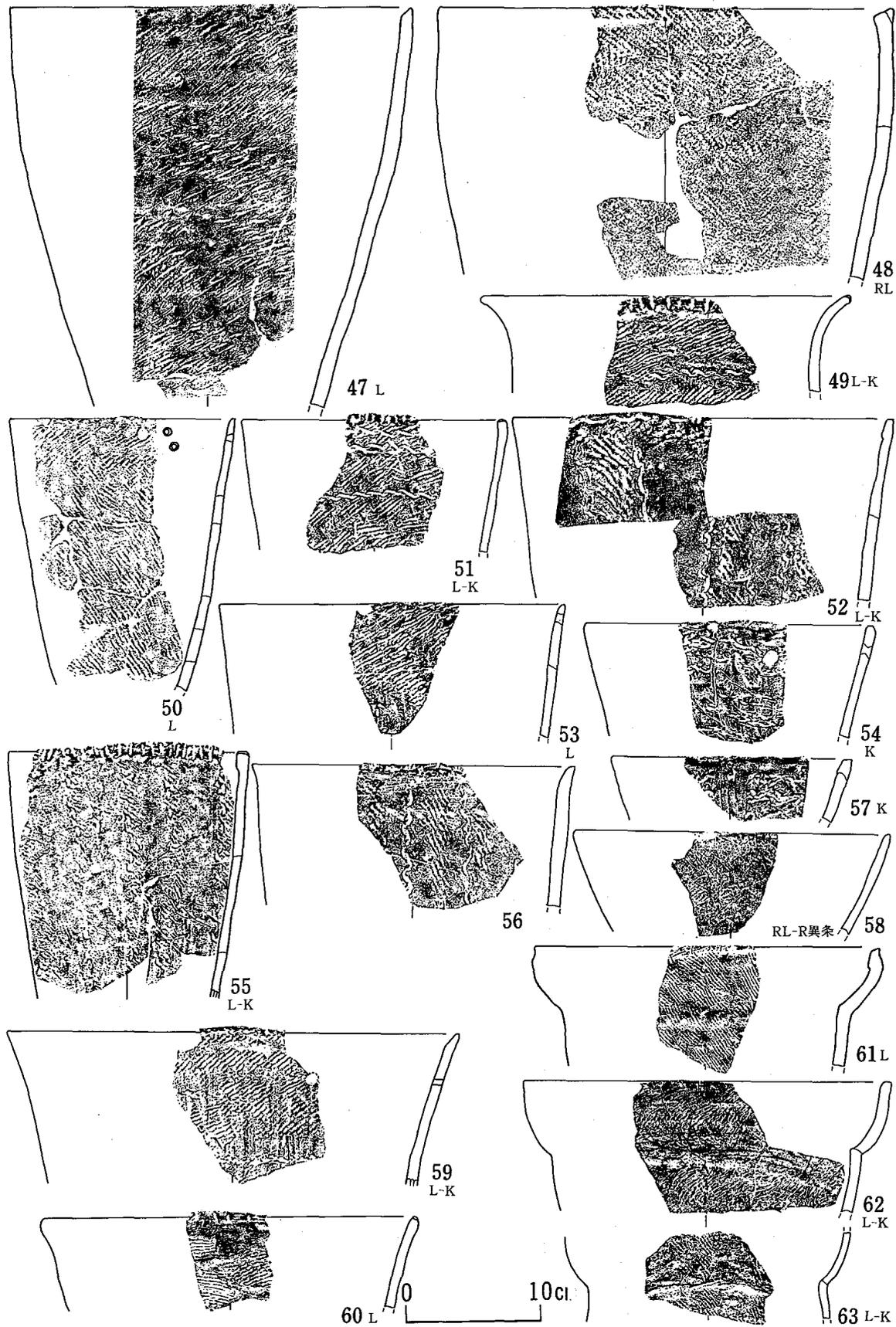
第2図 八辺貝塚出土土器 (1/6)



第3图 八边貝塚出土土器 (1/6)



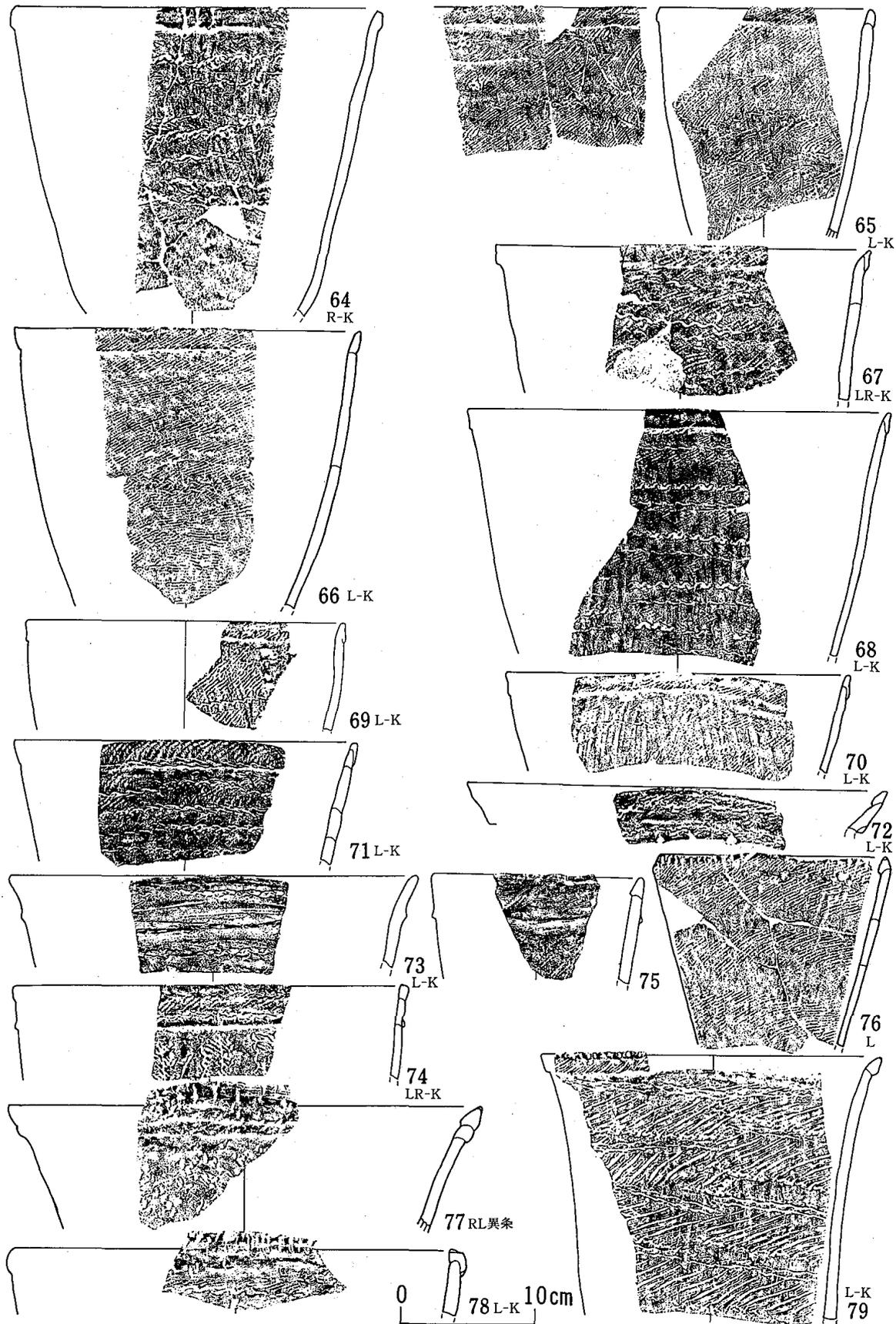
第4図 八辺貝塚出土土器 (1/6)



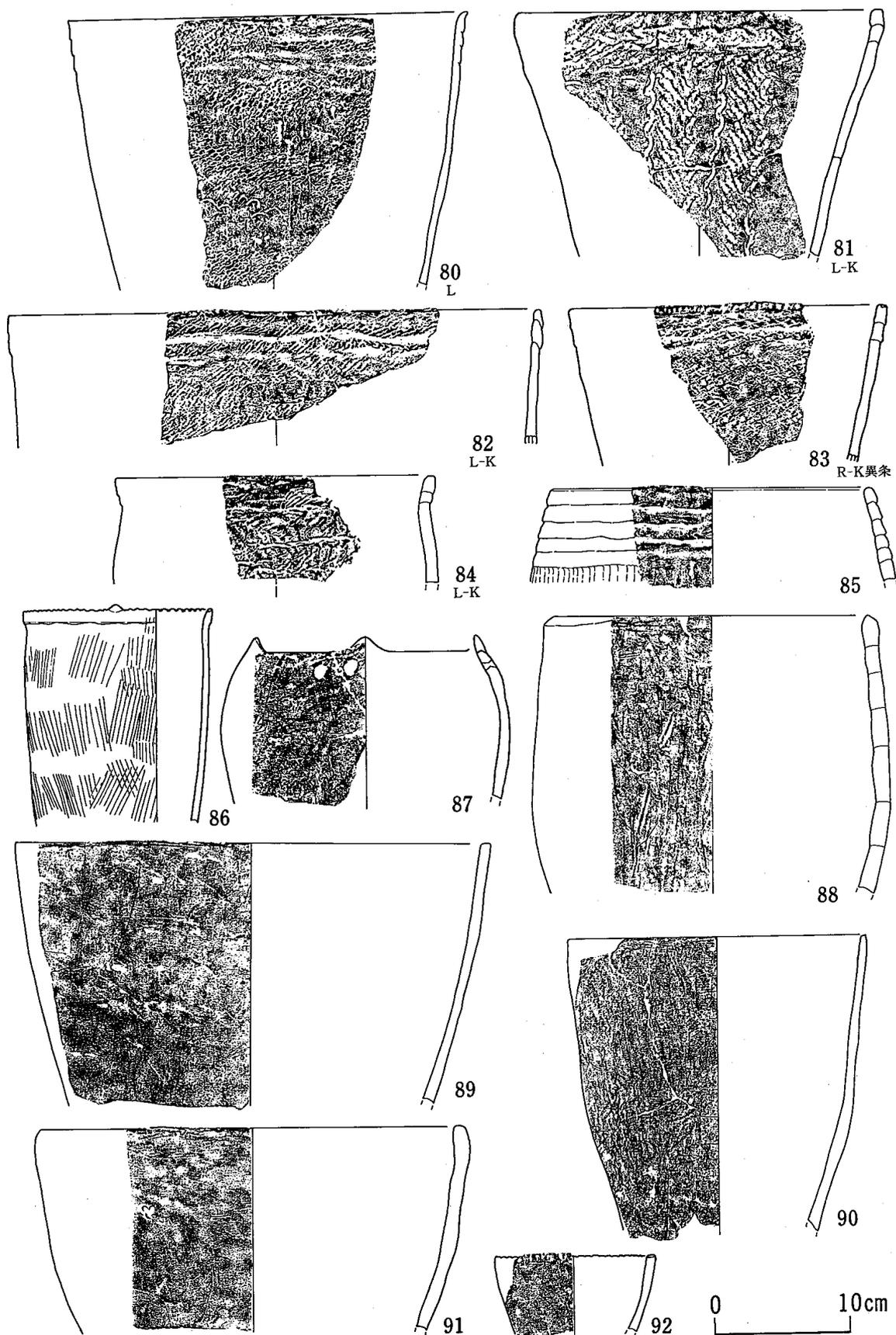
第5図 八辺貝塚出土土器 (1/6)

千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について

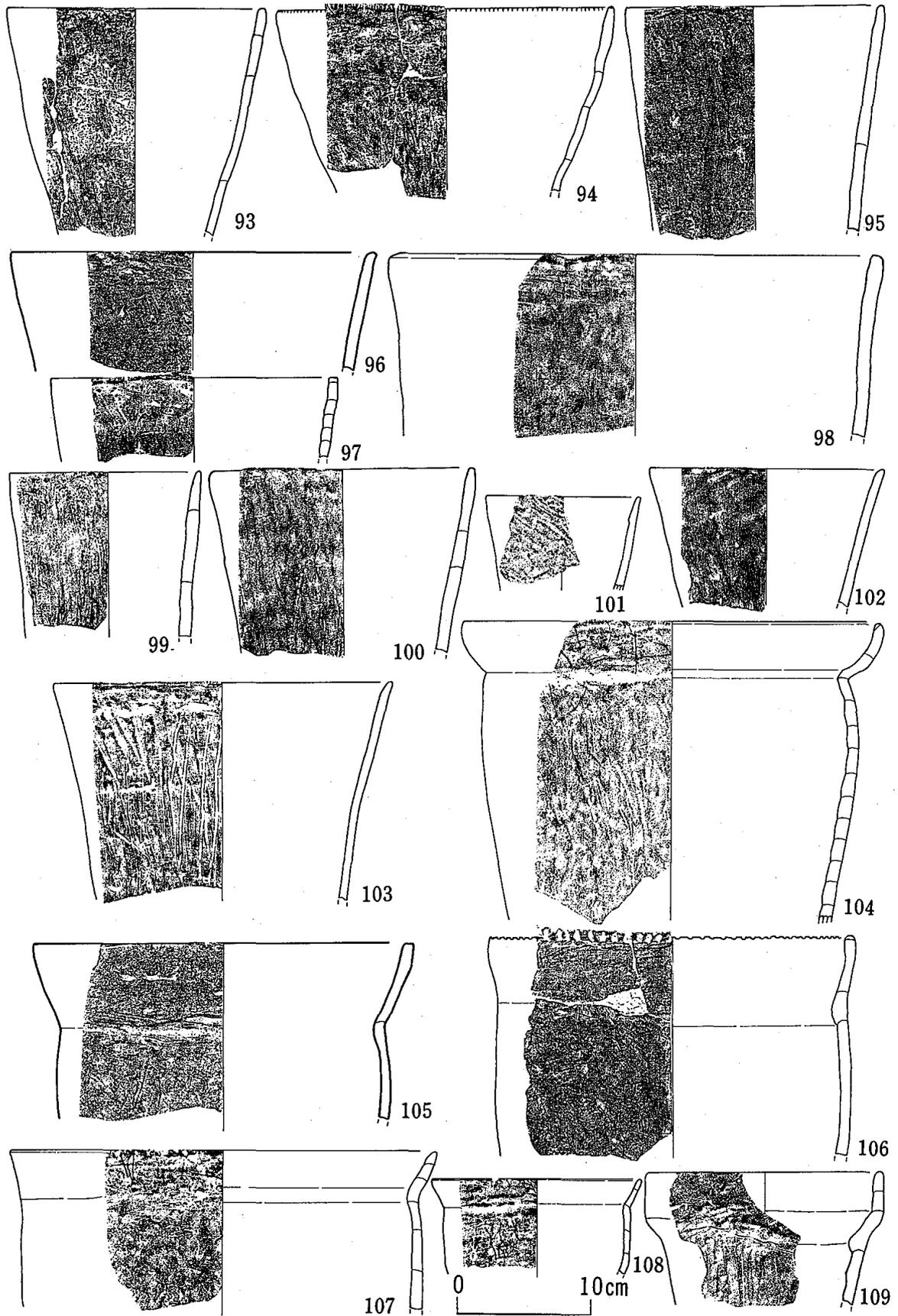
四三 (二七九)



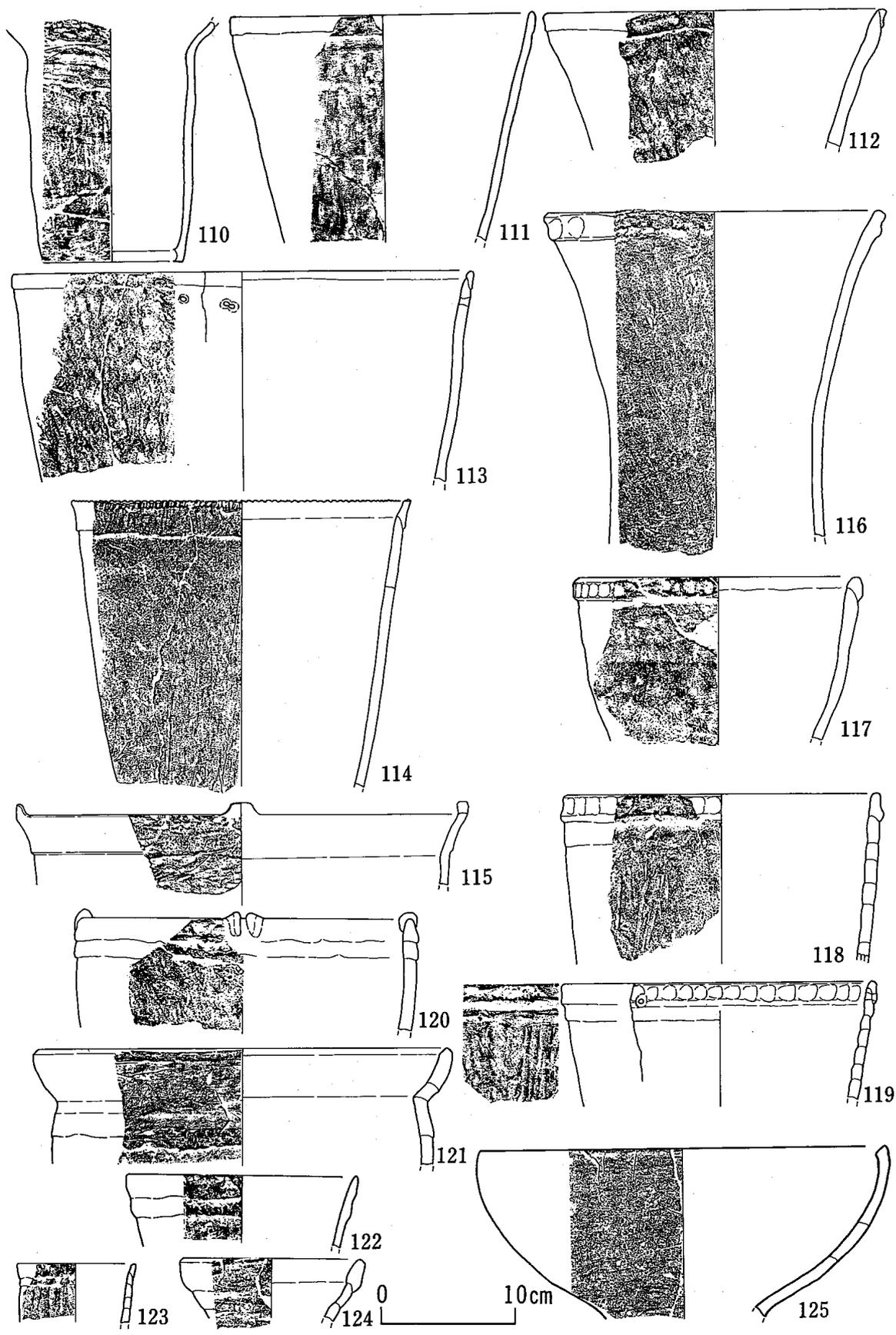
第6図 八辺貝塚出土土器 (1/6)



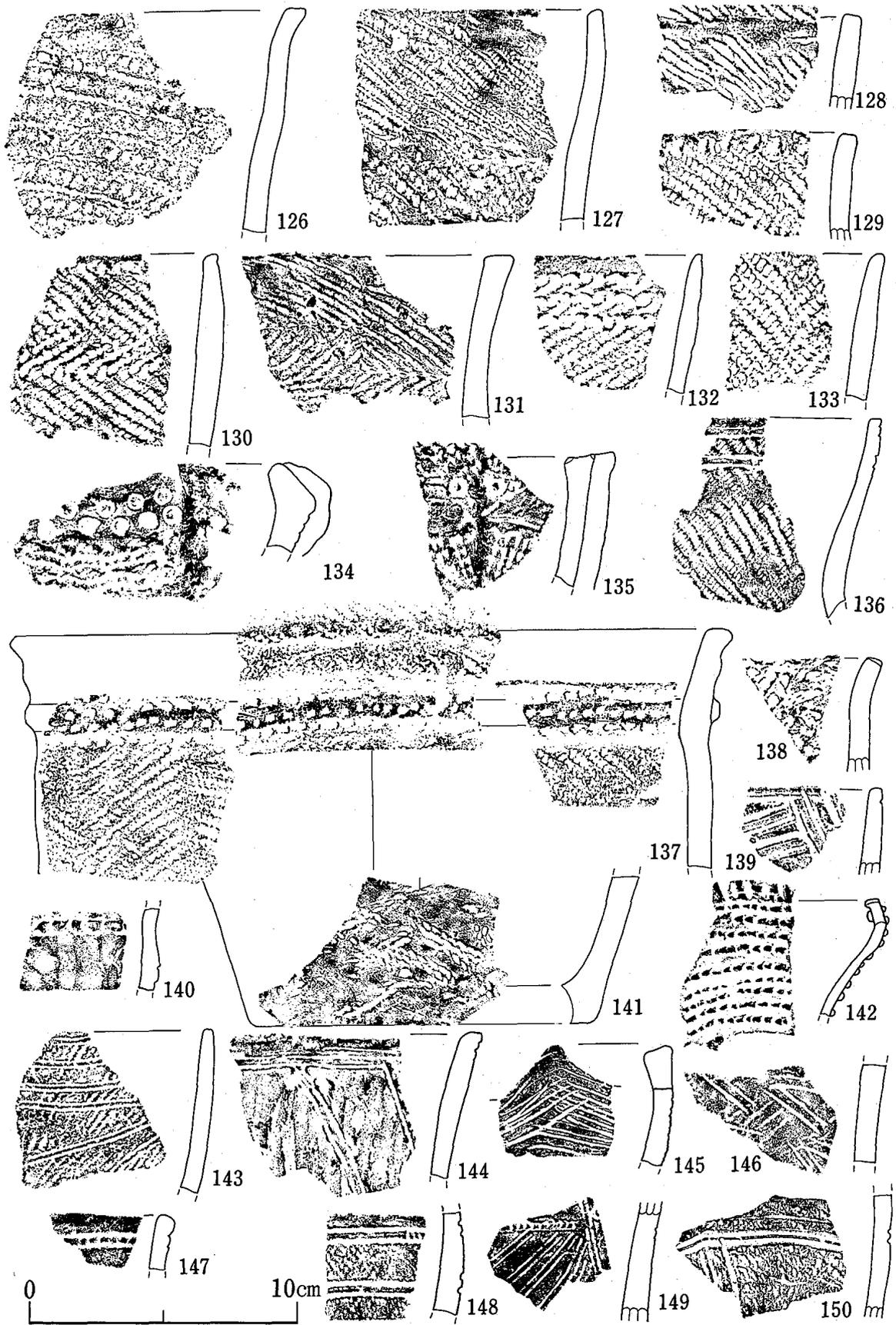
第7图 八边貝塚出土土器 (1/6)



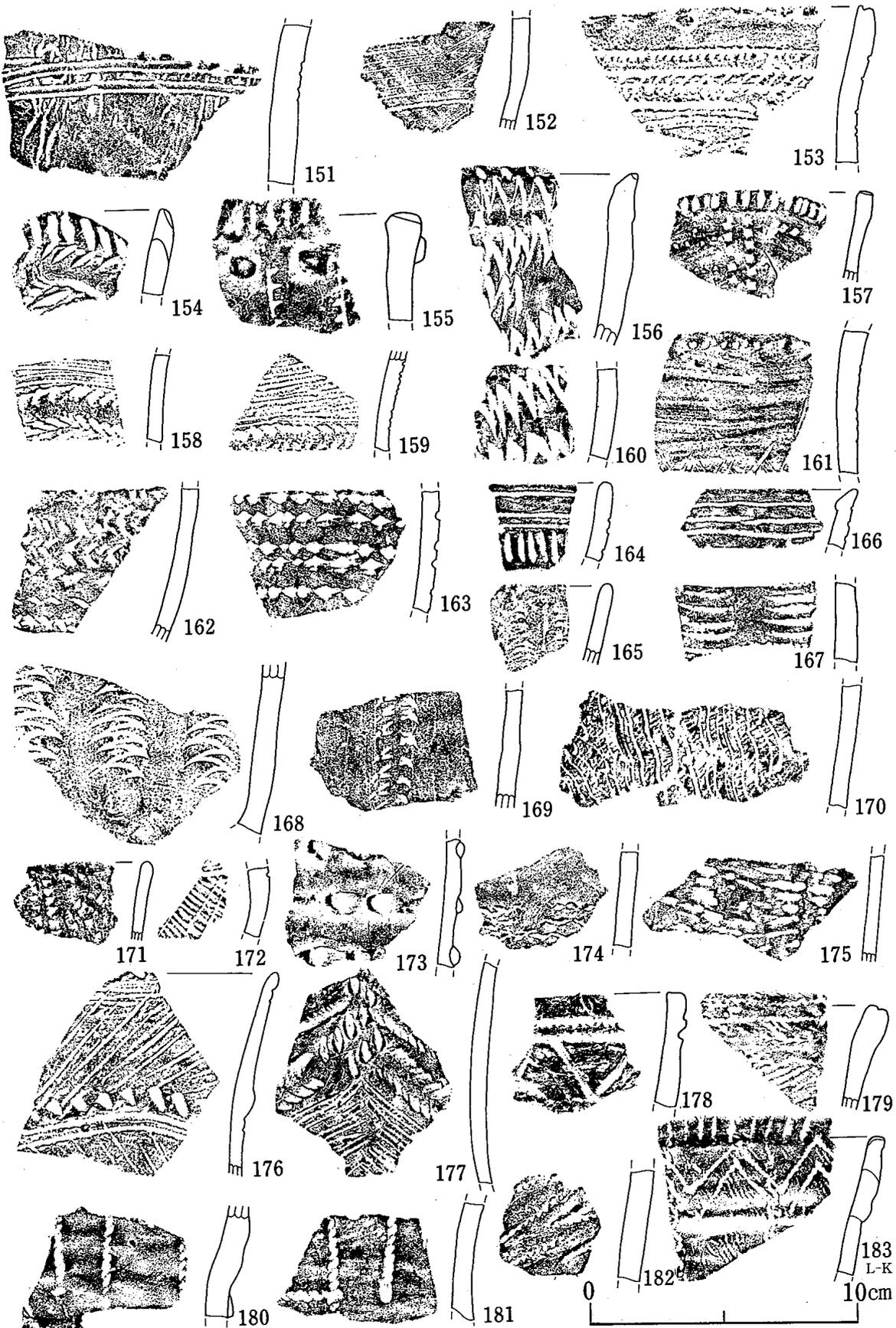
第 8 図 八辺貝塚出土土器 (1/6)



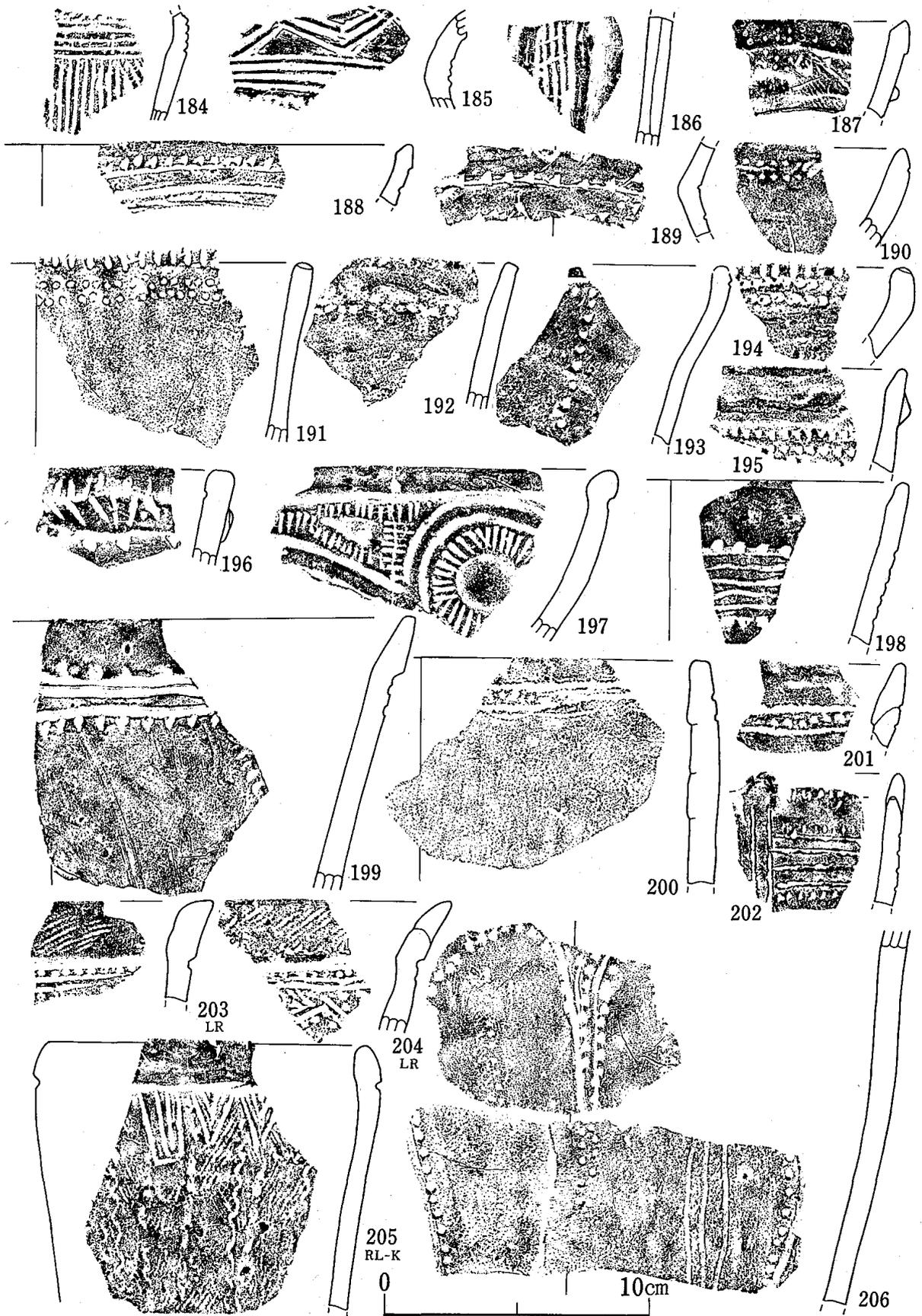
第9图 八边貝塚出土土器 (1/6)



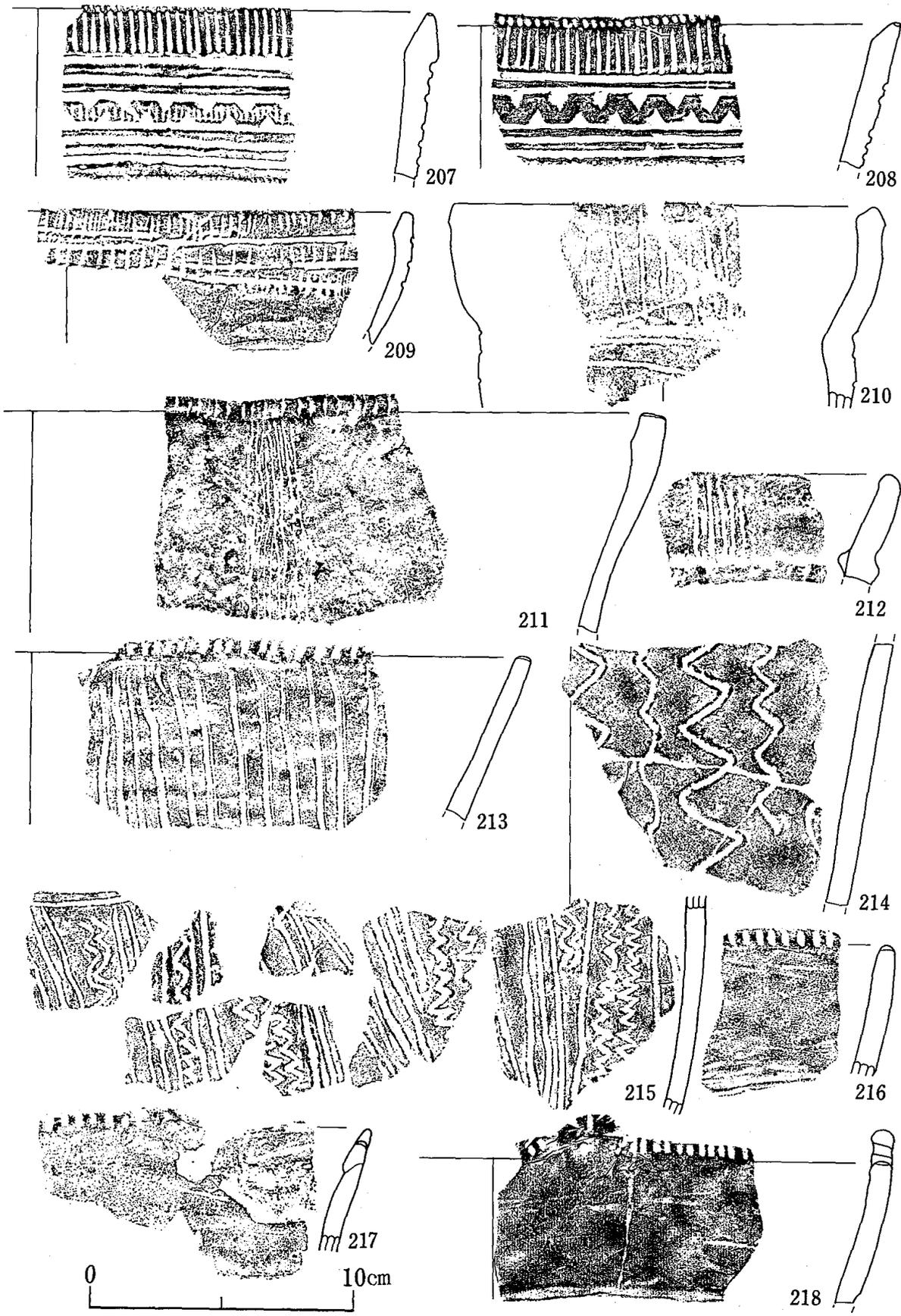
第10図 八辺貝塚出土土器 (1/3)



第11图 八辺貝塚出土土器 (1/3)

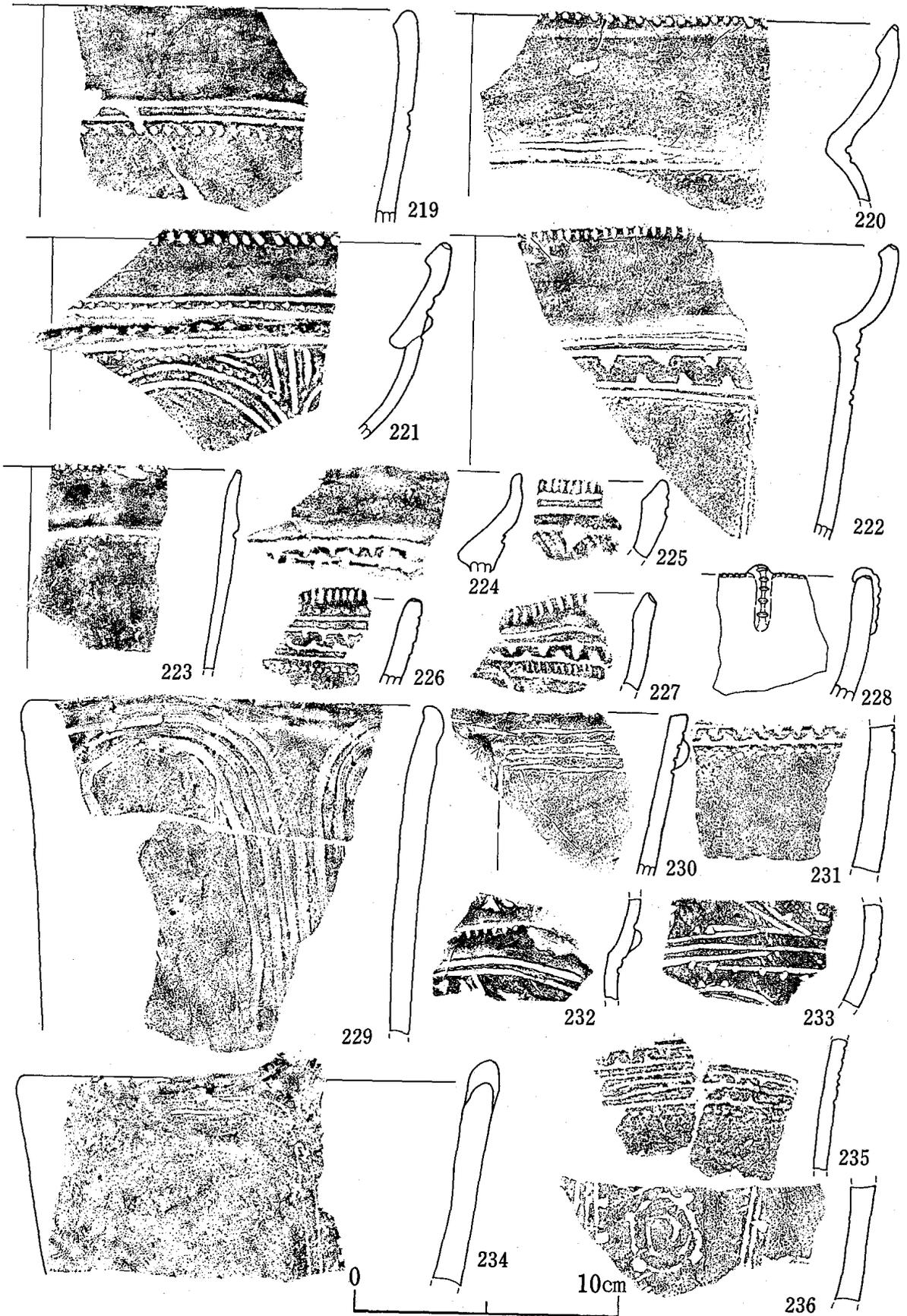


第12図 八辺貝塚出土土器 (1/3)

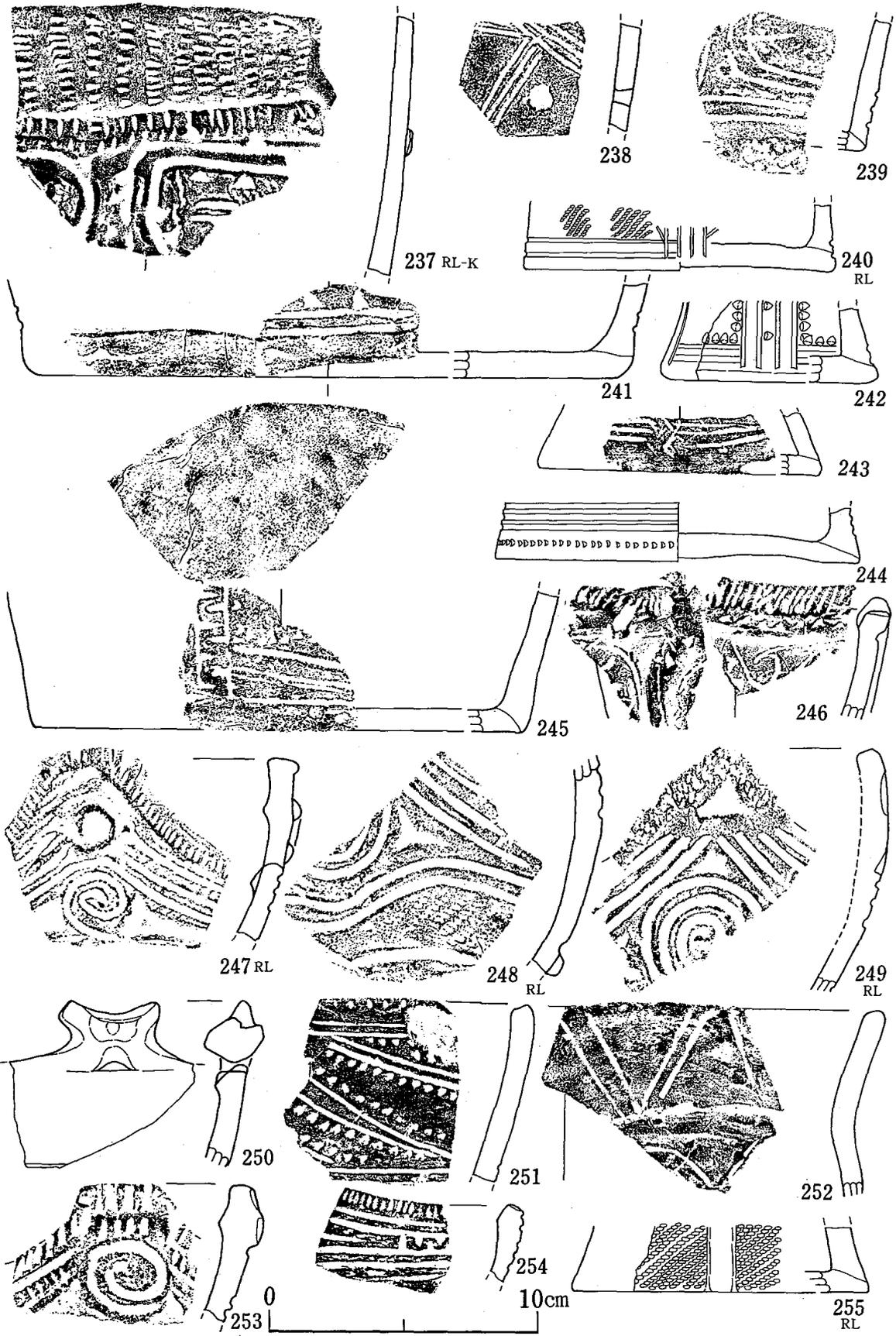


第13图 八边貝塚出土土器 (1/3)

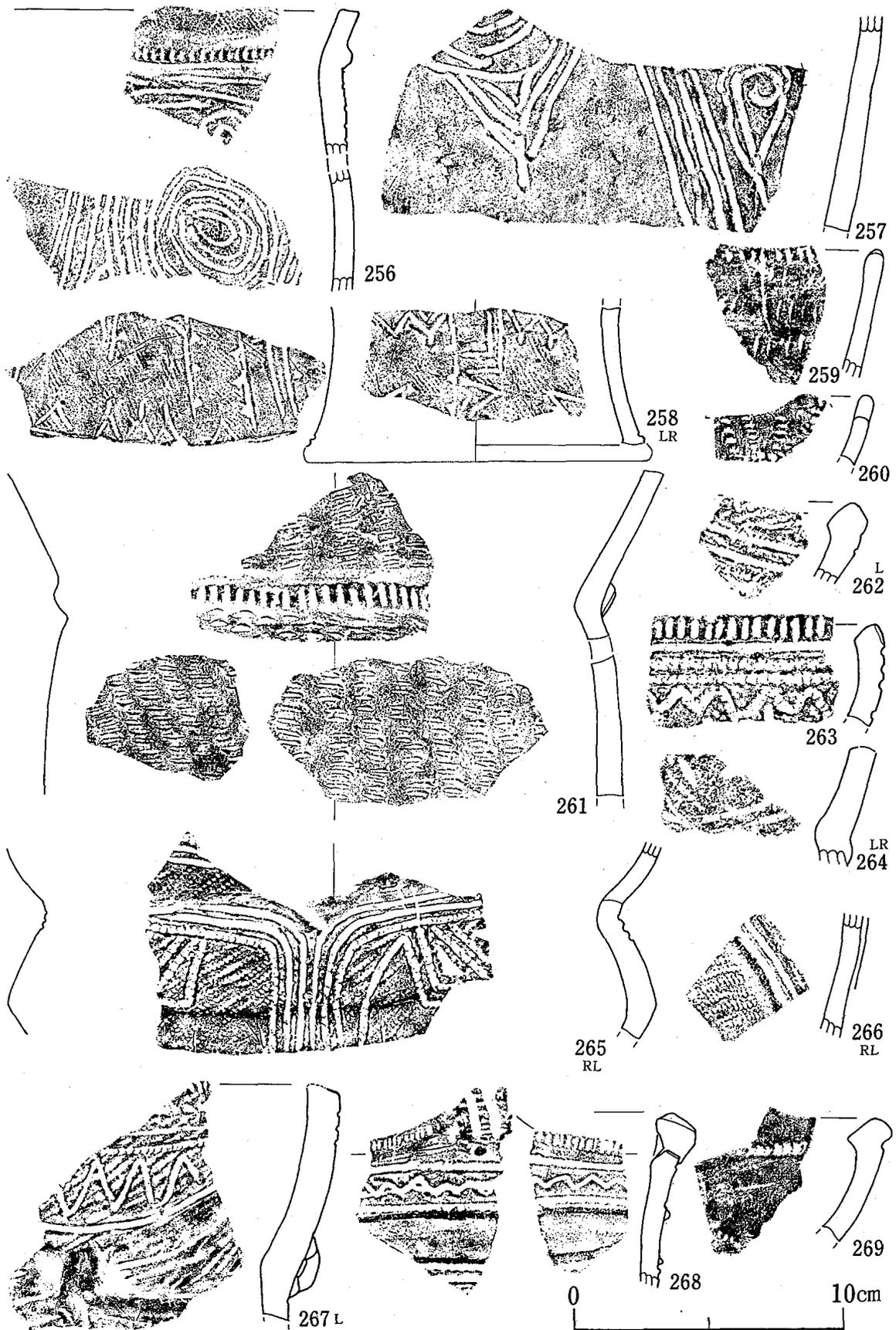
千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について



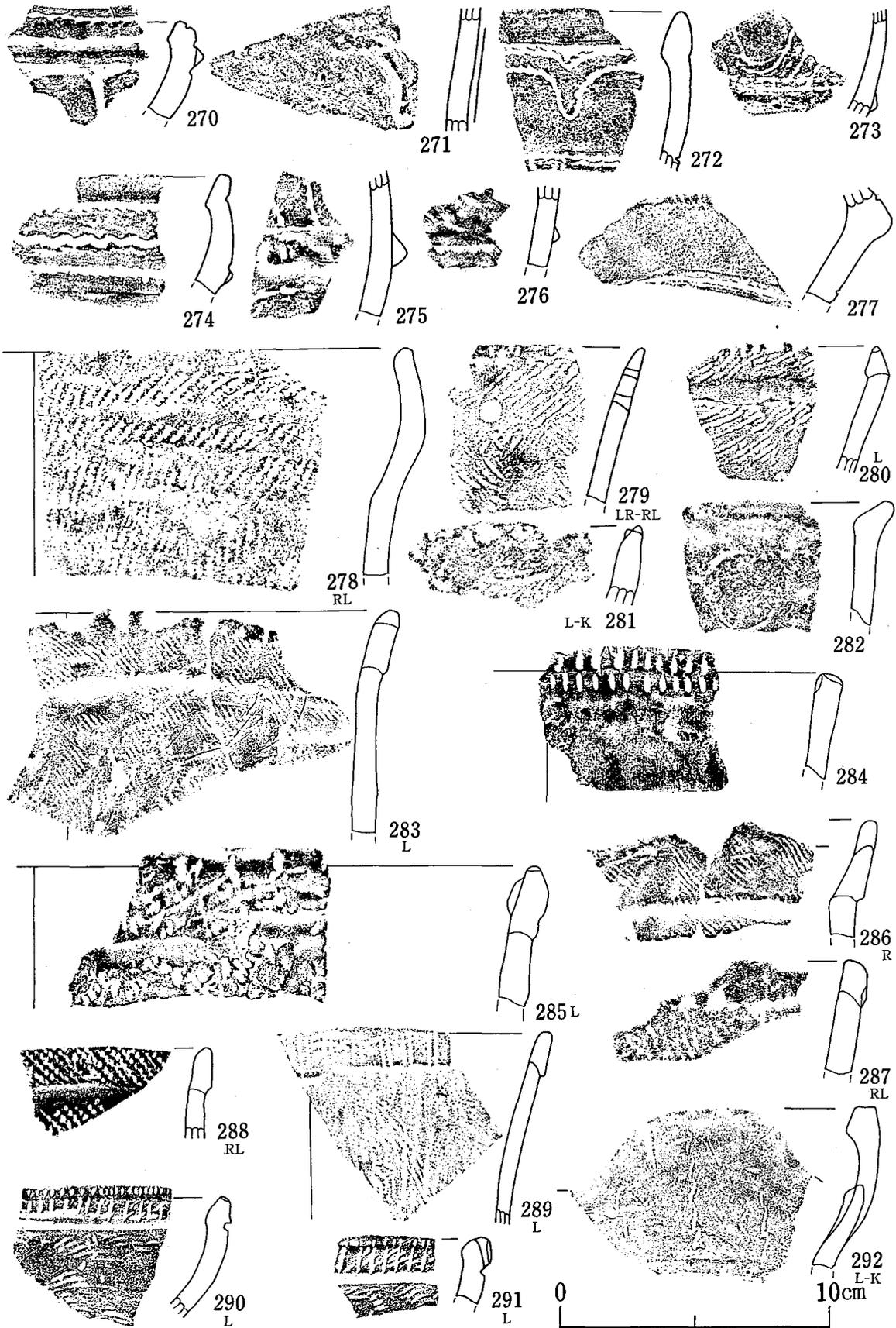
第14図 八辺貝塚出土土器 (1/3)



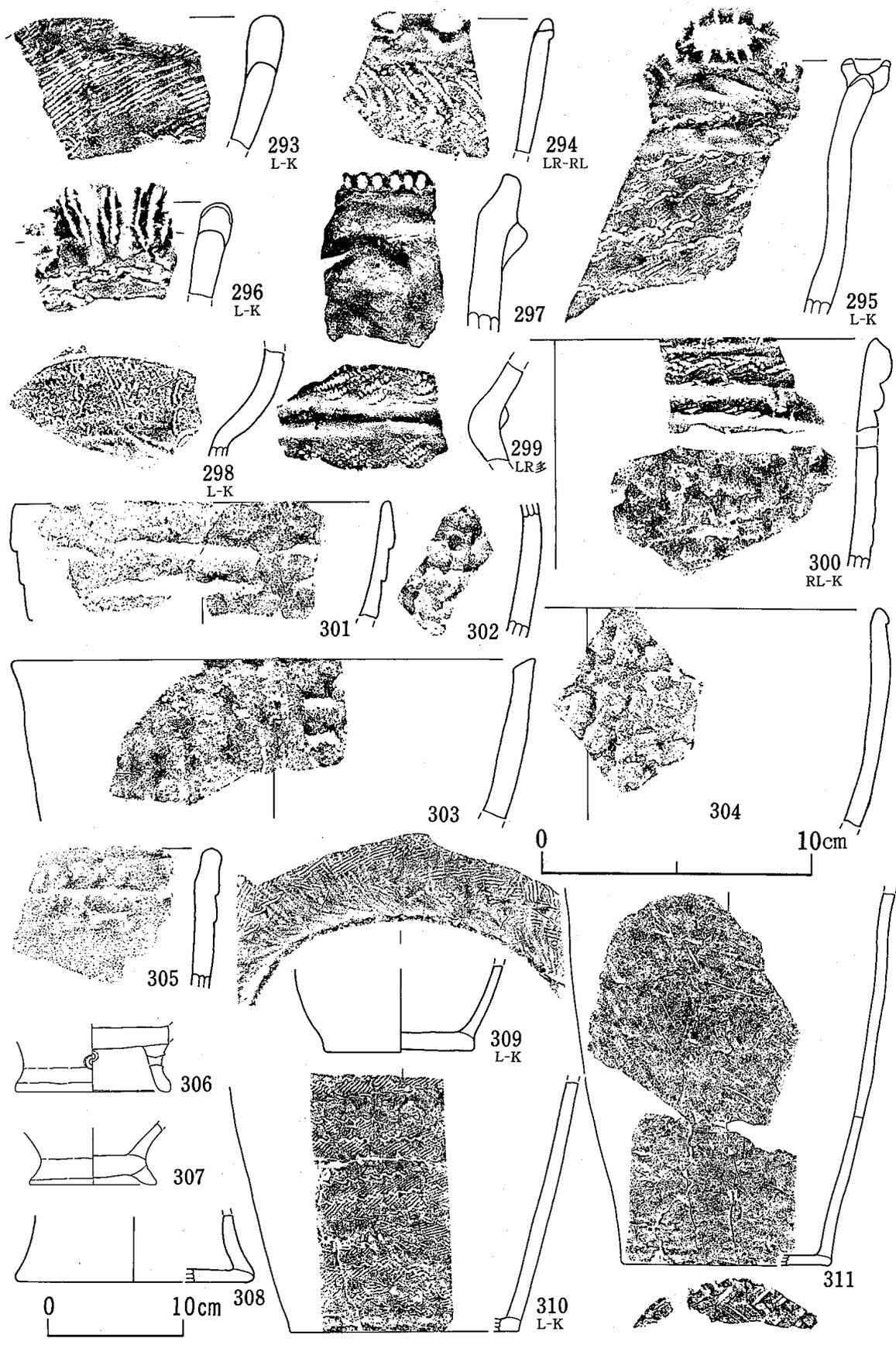
第15图 八边貝塚出土土器 (1/3)



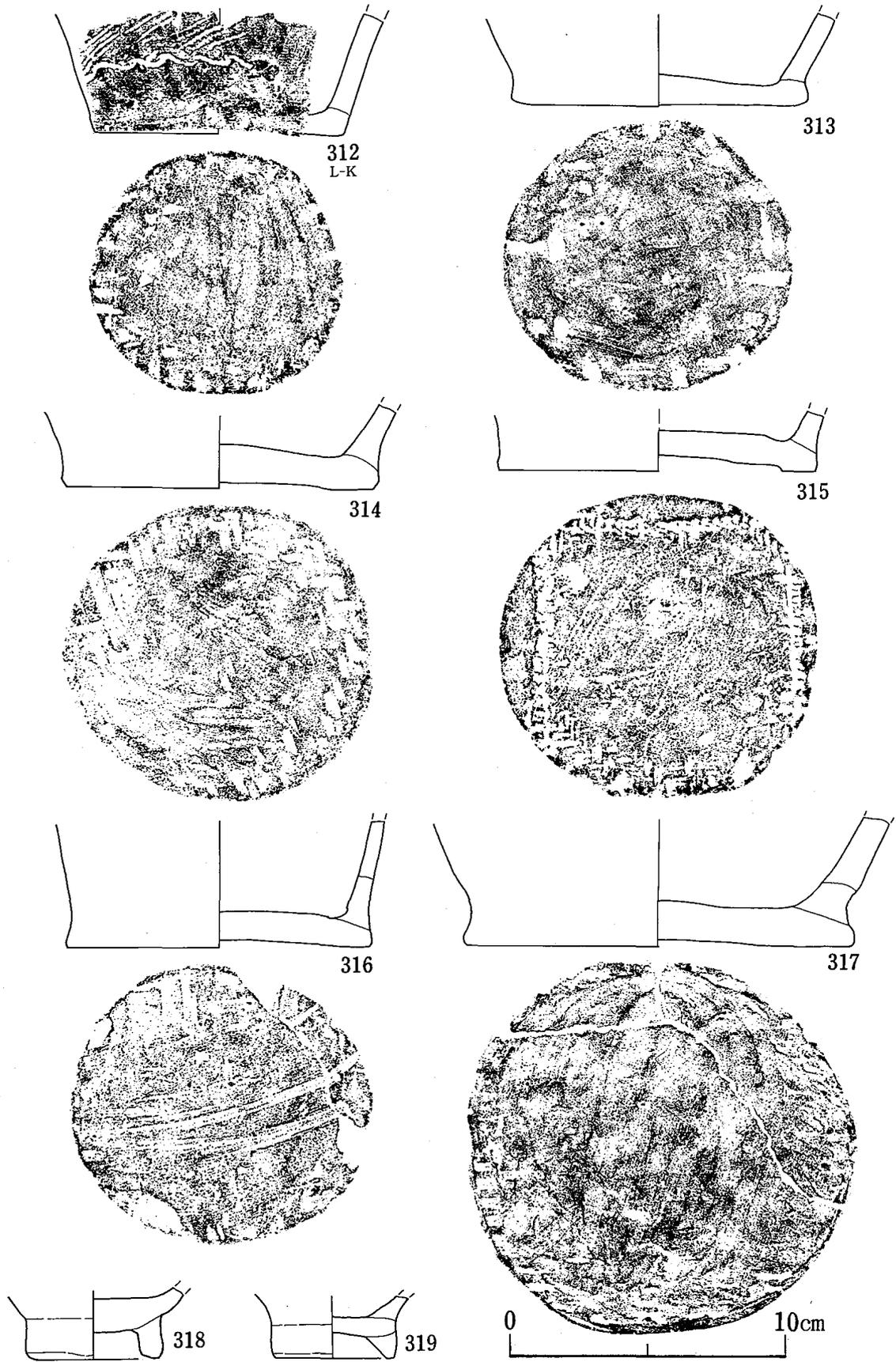
第16図 八辺貝塚出土土器 (1/3)



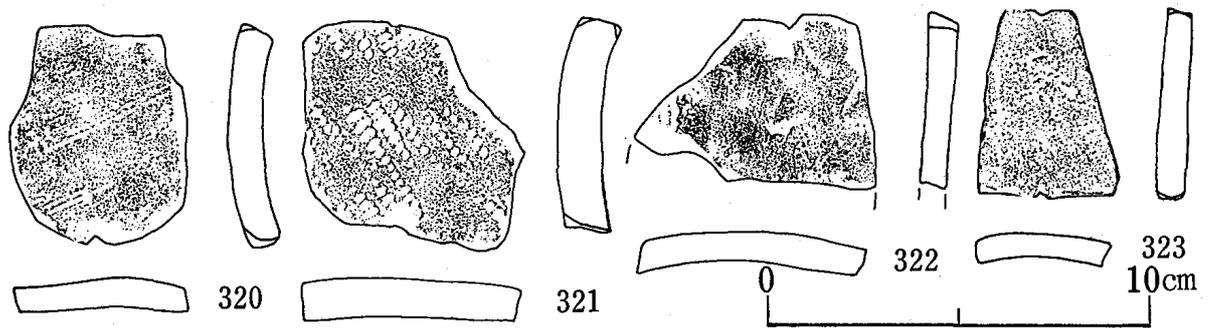
第17图 八辺貝塚出土土器 (1/3)



第18図 八辺貝塚出土土器 (293~305-1/3, 306~311-1/6)



第19图 八辺貝塚出土土器 (1/3)



第20図 八辺貝塚出土土器片錘 (1/3)

△八辺貝塚出土資料の

型式学的分析▽

ここでは特に、中期初頭の文様裝飾を持つ精製土器群である七群土器についてその型式学的序列を検討する。前述したように東関東地方の当該期の資料は、住居跡などの一括資料を有さず、層位的な所見も少ない。また資料自体も断片的で、系統的な変化をみることも不可能であった。よってここで八辺貝塚出土資料を中心に、東関東地方の例を合わせ、文様要素、<sup>6</sup>文様帯構成を取り上げて、その系統的、時間的組列を仮定したい。無<sup>7</sup>論、今後の集落調査など

により、その先後関係が検証される必要があることはいうまでもない。

また、八群とした半粗製・粗製土器については、文様要素の欠落により、型式学的序列をたどることは困難である。現在までの知見によっても、これら「下小野式」(江森他一九五〇)相当の土器群が、前期後半〜中期初頭の土器群に伴うことは今村氏の指摘の他、西関東地方でも多摩ニュータウン遺跡群(岩橋他一九八四他)などで諸磯b・c式に伴って八群二類a<sub>1</sub>・a<sub>2</sub>種に類するものが出土していることもあり、精製土器に比べその時間的変化が緩慢であることが予想され、編年の位置づけは容易ではない。精製土器の編年作業を急ぎ、ついで口唇部形状、器形、縄文施文などの細かい属性分析を基に検討を加えるべきと考え、今回は除外しておくこととする。

△文様要素▽当該期の資料は、竹管及びそれを加工したものを主要な文様要素とし、他に貝殻(七群七類)、指頭を用いたり、縄文原体を押圧などで直接裝飾要素として用いる。ここで、特に多くみられる竹管文を取り上げ、工具と施文法の組合せにより、文様要素を規定することとする。

工具として、細竹管をそのままもちいるもの(I類)、

半裁竹管(Ⅱ類)、太めの竹管の側縁部だけを残したヘラ状工具(Ⅲ類)、さらに切断し角部を作り出すもの(Ⅳ類)、Ⅳ類をさらに先端を加工し曲面を削ることによって、断面が細長い三角形を呈するヘラ状工具にしたもの(Ⅴ類)が分類される。施文手法として刺突(施文手法Ⅰ種)、単に器面に当て引いた沈線(口種)が多くみられるが、刺突の手法としては、器面に対して工具を直に当てる刺突(Ⅰ種)、斜位に当てる刺突(Ⅱ種)、水平に当てる横位押圧(Ⅲ種)、主に隆線上や口唇上に施す)、工具先端部の一端を押し当てる印刻(Ⅳ種)の四種に細分される。また主にⅢⅠⅤ類の工具を用い、三角形、円形状に半彫刻的に調刻するものを二種とする。

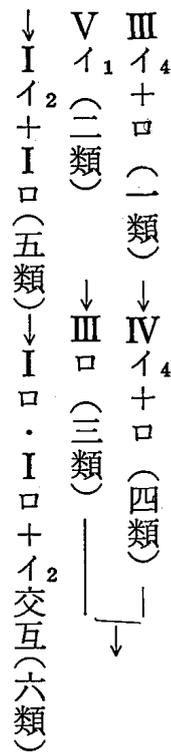
以上の工具と施文手法の組合せにより、単一沈線(Ⅰロ)、平行沈線(Ⅱロ)、細沈線(Ⅲロ)、円形状刺突(Ⅰイ)、竹管斜位刺突(Ⅰイ)、竹管横位押圧(Ⅰイ)、ヘラ刻み目(Ⅲイ)、ヘラによる爪形文(Ⅲイ)、大型三角形印刻(Ⅲイ)、小型三角形印刻(Ⅳイ)、細線状沈刻(Ⅴイ)、調刻文(Ⅲニ)が抽出されよう(図21)。

これらのうち、Ⅲイとするものは興津式に特徴的な三角文に比定され、八辺七群一類において、Ⅰロとする沈線文とともに器面を横位に廻っている。さらに八辺七群

一類にはそれが小型化したと思われるⅣイによる小型三角形印刻文と沈線の組合せによるものがより多くみられる傾向が指摘され、八辺四類の沈線と竹管斜位刺突(Ⅰイ)は、これが簡略化したものと捉えられよう。なお、五領ケ台式土器に特徴のないいわゆる「コ」の字状交互刺突文は八辺七群四Ⅰ六類(特に五類)に多くみられるが、このⅠイを交互、逆方向より刺突したものと理解されよう。六類は、沈線、平行沈線が主となっている。また、Ⅴイとした細線状沈刻は、八辺二類にみられるが、西関東地方五領ケ台Ⅰ式(山口氏のB型式、今村氏の細線文↓沈線文との施文順位によれば五領ケ台Ⅰa式)にみられるものである。これが八辺三類に多くみられる、口縁部のヘラ状工具による細沈線(Ⅲロ)に変化すると考えられよう。

以上の文様要素の変遷を整理すると、前期興津式の三角文からの系譜が、沈線と組合わり三角文が小型化・簡略化したのち、装飾効果が刺突自体から沈線的効果へと推移し、文様区画を意識したものとなって頸部や胴部の柱状区画に用いられるようになったと捉えられよう。筆者が阿玉台式土器成立期の分析に於て示したように、五領ケ台式後半期では平行沈線や沈線(小林一九八四の

A I期—八辺七群五類が相当、なお平行沈線は西関東に比べ少ない)、次いで単一沈線による玉抱き三叉文、渦状文(小林一九八四のA II期—八辺七群六類が相当)が主要な文様要素となる。また、沈線に沿う竹管斜位刺突やヘラ刻み目、波状口縁波底部下の口縁部文様帯内の部分的な「コ」の字状交互刺突文の残存が付加的にみられる。一方、西関東地方細線文系土器に起源を持つVイ<sub>1</sub>は、八辺七群二類に用いられた後、同三類の細沈線へ転化し、口縁部充填から柱状区画に近い形での集約化(八辺七群三類b種)によって沈線文に同化吸収されたものと思われる。以下に、型式学的組列を仮定しておく。

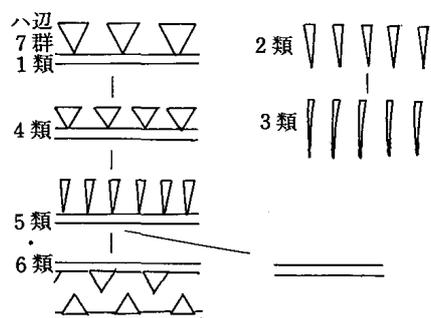


△文様帯構成V 上述のような文様要素の変化は、文様区画の発生に連動したものであり、同時に文様帯構成の明確化に連なると考えられる。文様帯が区分されない東関東前期末葉土器群の横位モチーフを均一に重段させるもの(文様帯構成A)から、次第に文様帯を重帯させ、各文様帯によって文様モチーフを異にし、さらに文様帯内

を区画していく方向性こそが中期土器群の型式構造と考えられるのである。

この前期的な文様帯構成に近い形態として、八辺七群一類a種の口唇直下に若干の無文部や指頭押圧のアクセントを設け、胴部の横方向文様の重段と弱い区分を成すもの(文様帯構成B、図1—2例)、横方向文様の重段が中央部に集約し、上下の無文部・縄文帯と区分されるもの(文様帯構成C、図1—1例)がまず、成立したものと考えられる。それらがさらに、八辺七群四類の口唇部直下に横走する文様要素が明確化するもの(文様帯構成D、図1—8例)、その胴部に縦走する文様要素が柱状区画を成すもの(文様帯構成E、図1—9、10例)へと発展したと捉えたい。一方、八辺七群二類に見られる、口唇直下の細線文施文部とその下の口縁部文様帯による構成(文様帯構成F、図1—5例)、その胴部文様帯に柱状区画が意識されるもの(文様帯構成G、図1—4例)は、八辺七群一類の文様帯構成B・Cに対応すると想定される。さらに、八辺七群三類の、口唇直下の細線状沈線文帯と胴部無文帯によるもの(文様帯構成H、図1—7例)、胴部が垂下する沈線で柱状区画されるもの(文様帯構成I、図1—6例)は各々、文様帯構成F

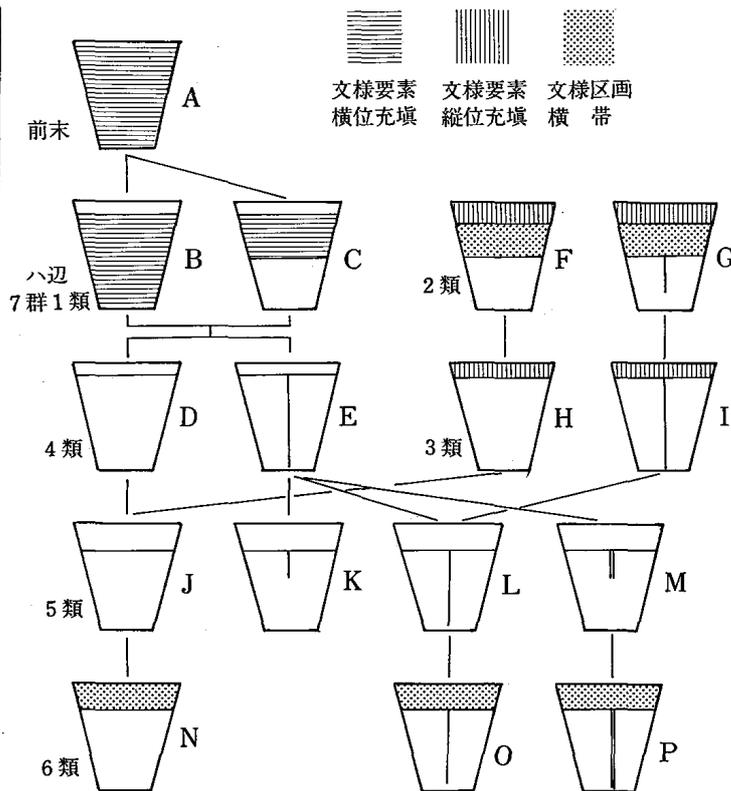
施文法 工具	イ1	イ2	イ3	イ4	ロ	ニ
I	●	◎	◐	◑		
II	∩					
III	∩	◐	◑	△		▽
IV	□			△		
V	▽	▽				



第21図 文様要素の分類と変遷

文様要素は文様工具と施文法の組み合わせで規定され、ほぼ八辺七群土器の各類と対応する。

28例)、文様帯構成Lの口縁部に文様モチーフが



第22図 文様帯構成の分類と変遷

文様帯構成は口縁・頸部・胴部の各文様帯の構成で、ほぼ八辺七群土器の各類と対応する。

・Gより発展したもので、八辺七群四類の文様帯構成D・Eに対応すると捉えられる。以上、文様要素の流れと対応する文様帯構成の二つの系統は、小林の阿玉台式土器成立期A I期に当たる八辺七群五類において、口縁部無文帯と胴部文様帯との区分が明確な文様帯構成J・Mへと発展・統合することが認められる。即ち、頸部に横走る沈線が集約し、胴部に無文帯が配される文様帯構成J(図2-18、9例)、胴部文様帯に「Y」字状、弧線状沈線が垂下する文様帯構成K(図1-11、12、2-22例)、胴部が沈線による柱状区画となる文様帯構成L(器形よりやや変形するもの図2-21例)、文様帯構成Kの胴部文様モチーフが隆線での表現となる文様帯構成M(図2-16、17例)が抽出されよう。さらに、筆者の阿玉台式土器成立期A II期に当たる八辺七群六類では、五類の口縁部無文帯に文様モチーフが展開し、次時期の阿玉台式土器へと継続していく様相を示すのである。即ち、文様帯構成Jの口縁部に文様モチーフが加えられる文様帯構成N(図3-

第3表 文様要素と文様帯構成の組み合わせ

文様要素 \ 文様帯構成	F・G	H・I	B・C	D・E	J・K	L・M	N・O・P
V <sub>イ1</sub> : 細線文	2類						
III <sub>ロ</sub> : 細線状線		3類					
III <sub>イ4</sub> +III <sub>ロ</sub> : 三角文と沈線	2類		1類				
IV <sub>イ4</sub> +I <sub>ロ</sub> : 小三角文と沈線			1類	4類			
I <sub>イ2</sub> +I <sub>ロ</sub> : 竹管刺突と沈線		3類		4類	5類		
I <sub>ロ</sub> +I <sub>イ2</sub> 交 : コの字交互刺突					5類		6類
II <sub>ロ</sub> : 平行沈線							6類
I <sub>ロ</sub> : 沈線							6類
系統・時期	西関東系古期		東関東系古期		東関東系新期		

注) 太字は主体となる組み合わせ。2・3類は西関東系といっても西関東のものそのものではない。

加えられる文様帯構成O(図3-24例)、文様帯構成Mより転化した、口縁部文様帯と隆線による柱状区画を有す胴部文様帯による文様帯構成P(図3-29)が指摘できる。これらのうち、文様帯構成J~Oは小林一九八四の阿玉台式土器成立期の「文様帯構成A」、同じくPは小林一九八四の「文様帯構成B」に比定される。以上より、次のような流れが想定し得る(第22図)。

A(東関東)→B・C(七群一類)  
 前期末) F・G(七群二類)  
           ↓D・E(四類)  
           ↓H・I(三類) ↓

↓J~M(五類) ↓N~P(六類)

△文様要素と文様帯構成の組合せ▽ 上に  
 見てきた文様要素と文様帯構成の各タイプ  
 の組合せをみると、表3の様になる。V<sub>イ</sub>  
 とF・G、III<sub>ロ</sub>とH・I、III<sub>イ4</sub>+I<sub>ロ</sub>とB  
 ・C、IV<sub>イ4</sub>+I<sub>ロ</sub>とD・E、I<sub>イ2</sub>+I<sub>ロ</sub>と

千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について

J、M、IロとN、Pの組合せの頻度が高いものと思われ、これらは各々七群二類、三類、一類、四類、五類、六類各々の典型的なタイプといふことができよう。文様要素及び文様帯構成の各々の型式学的組列と、組合せの流れに矛盾する点はなく、次に示すような土器群の変遷観は妥当性の強いものといえよう。



△系統的整理と時期設定▽

以上、文様要素と文様帯構成の整理によって中期初頭段階古期における二つの系統が抽出された。即ち、東関東地方前期末葉段階の土器群より直接系譜がたどれる、八辺七群一類 ↓ 四類の流れと、西関東地方五領ケ台Ⅰ式の細線文土器群の搬入・影響から成立し、その後東関東的な色彩を徐々に強めていったと考えられる八辺七群二類 ↓ 三類の流れである。各々は文様要素に独自の系譜を持ちながら、文様帯構成において一類と二類、四類と三類の間にみられるような類似性が認められ、時間的な並

行関係が推測されるのである。従来の編年研究では東関東の資料的不備により、五領ケ台Ⅰ式には八辺七群二類(今村氏の五領ケ台Ⅰa式、山口氏のB型式)のみが、五領ケ台Ⅱ式の古い部分には八辺四類(今村氏の主として五領ケ台Ⅱa式及びⅡb式の一部、山口氏のE型式の一部)のみが取り上げられてきたため、上記の二つの系統の存在が認識し得なかつたといふことができよう。

この様な、東西関東の地域性に起因する二系統の土器群が、新时期に至り東関東に於て統合したものが八辺七群五類(小林の阿玉台式土器成立期AⅠ期、今村氏の五領ケ台Ⅱb式の一部、山口氏のG型式の一部)、ついで六類(小林の阿玉台式土器成立期AⅡ期、今村氏の五領ケ台Ⅱc式がほぼ対応、山口氏のEV型式の一部)へと発展し、次段階に角押文の成立を見ることによって、阿玉台式土器へと継承していったものと考えられる。

以下に、東関東地方中期初頭段階の時期設定としてI、IV期をまとめておく。

I期 東関東地方在地のものとして、沈線十三角状印刷を主要文様要素、文様帯構成B・Cを採る八辺七群一類土器、及びそれに西関東地方に系譜がたどれる細線文を主要文様要素、文様帯構成F・Gを採る八

辺七群二類土器が伴う。

II期 東関東地方在地のものとして、沈線十竹管斜位刺突を主要文様要素、文様帯構成D・Eを採る八辺七群四類土器、それに西関東のものから発展した細線状沈線を口唇部に集め、文様帯構成H・Iを採る八辺七群三類土器が伴う。

III期 前時期までの二系統が統合し、沈線、平行沈線、「コ」の字状交互刺突を主要文様要素、文様帯構成J・K・L・Mを採る八辺七群五類土器が展開する。

IV期 沈線を主要文様要素、文様帯構成N・O・Pを採る八辺七群六類土器が展開する。

以上のうち、西関東地方五領ヶ台式土器群に直接帰属する可能性を持つ八辺七群二類土器を除いたものに、東関東独自の伝統土器群としての位置を与え、これに今回検討し得なかった八辺七群七類及び八群土器の一部を加えた土器群をもって、「八辺式土器」を仮説的に提唱したい。その上で西関東地方五領ヶ台式土器群、中部地方集合沈線文系土器群と対比させてこそ、当該期の土器様相が解明され、また東関東地方の浮島式・興津式土器群から阿王台式土器群へと連なる伝統土器群の動態が検討

し得るからである。

#### 四、まとめ

以上、八辺貝塚出土土器の整理を通して、次のような点を確認し得た。

i 東関東地方独自の伝統に属する土器群を指摘し得た。さらにそれらに伴うと思われる西関東五領ヶ台式の影響下にある土器群を示した。

ii 上記の二系統の土器群を、文様要素・文様帯構成から時期的に整理し、以前小林一九八四において阿王台式土器成立期A群I・II期として東関東の五領ヶ台式土器新期に位置づけた土器群へと統合されることを示した。これらについて、東関東中期初頭段階の時期設定としてI・IV期の型式学的な変遷観を仮定した。

iii これらの東関東在地の土器群は、前期浮島・興津式土器群に系譜が求められ、さらに阿王台式土器群へと発展する、地域的な伝統土器群の流れの中に位置づけられると考えられるものであり、「八辺式土器」として設定される可能性を示した。

以上の見解を、検証し研究を進めていくため、以下の

ような検討を必要とする。

- 1 西関東地方五領ヶ台式土器群、北関東・東北地方大木式土器群との編年対比・相互関係を検討する。
- 2 東関東地方における資料を網羅し、各期毎の分布の様相を明確化する。
- 3 集落・貝塚調査を待ち、住居跡一括資料等による層位的な検証を行う。
- 4 今回分析より除外した七群七類、八群土器の検討を行う。

以上の過程を経て改めて「八辺式土器」設定の是非を問うこととした<sup>(10)</sup>。

本稿を草するに当たりこの様な機会と暖かいご指導を頂いた故清水潤三教授、江坂輝彌教授、鈴木公雄教授、また多大なご援助を下された西村正衛教授、明石新、安藤広道、稲村晃嗣、今村啓爾、小島弘義、佐々木藤雄、塚本師也、山本暉久、羽生淳子の各氏に謝意を表したい。また、図版作成等に多くの学生諸氏の協力を得たが、特に故村上徹君に多くの示唆を得たことを記しておきたい。

注

- (1) 黒曜石製石器は、橋本氏が段間型篋状石器として報告している(橋本一九八六)。
- (2) 調査の概要については、故清水教授の報告の他、御教示頂いたことをまとめた。
- (3) 施文工具と施文法によって規定される文様の最小単位を文様要素とする。この内、最も多用され、文様モチーフを表出するものを主要文様要素、付加的に施され文様モチーフを補完するものを付加文様要素とする。この概念規定は、小林の勝坂式・阿玉台式土器成立期(小林一九八四)、中部・西関東前期末葉段階(小林一九八六)での土器分析に準ずる。
- (4) この他、前期末葉段階と考えられる貝殻文土器は、横浜市池辺第4遺跡(今井他一九七四)、受地だいやま遺跡(重久他一九八六)、横須賀市室ノ木遺跡(赤星一九七三)、多摩市多摩ニュータウン内遺跡群No.676遺跡(小林一九八三)、No.740遺跡(岩橋他一九八四)等で、アナダラ属貝類とおもわれる貝殻背圧痕文や条痕文土器の報告がある。何れも、八辺七群七類土器とは若干様相を異にする様である。
- (5) この点については今村氏も前出の論考中で「五領ヶ台Ⅱ式期に横浜市北部が東関東の土器の分布圏に属するという事実を考慮するならば、I a式期にも東関東の土器

がこのあたりまで広がっていて、ここにあげた横浜市北部のIa式は実は東関東的な土器であり、これに対してIa式期の細線文土器が西によって分布していた可能性を考慮しなければならない」と、検討の余地を残している。

なお、本文中特に触れていないが、土器の胎土・焼成にも東西関東の差異が認められる。この点についても今村氏の記述を紹介しておくこととする。「西関東の土器の胎土は、石英閃緑岩系の岩石に由来すると考えられる角閃石、雲母、石英、長石の大きな粒をふくみ、赤褐色の焼成が多いのに対し、東関東の土器の胎土はきめが細かく、円磨した砂粒を含み、雲母を多く含むものは稀で、含む場合にも粒が細かく白っぽいものが多く、焼成は後期の土器を思わせるような灰黒褐色の良好な焼成のものが多い」（今村一九八五）。

なお、当該期の研究においては山内清男氏（山内一九三七）、江坂輝彌氏（一九四九）などの型式設定期の学史的な理解が不可欠であるが、これらの点については松村恵司氏（一九七四）に詳しく今回は割愛する。

(6) ここでは、千葉県北部・茨城県南部の東京湾東北岸、霞ヶ浦周辺地域に限定することとする。この地域は前期浮島・興津式土器群、中期阿玉台式土器群の分布中心地域であり、小林の阿玉台式土器成立期の分析での霞ヶ浦

千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について

周辺地域（K<sub>1</sub>地域）に相当する。無論、東京湾西岸地域も南関東や、北関東にも出土例は期待できるが、系統的区分の不明確な現段階では、他の伝統土器群との影響関係を極力排除する必要がある、地域を限定して分析を加えたい。

(7) 竹管の分類コードは、対象とする土器群に応じて設定するため、旧稿の勝坂式・阿玉台式土器群（小林一九八四）、前期末葉土器群（小林一九八六）に対するものは異なっている。施文法でも、連続刺突である旧稿でいう八種は、殆ど見られなかったため今回は用いていない。

(8) 口縁部、頸部、胴部等の各文様帯の組合わり方・構成のされ方である。本資料では主に口縁部、胴部文様帯が抽出された。なお、七群二、三類では口唇直下の文様要素縦位充填部を口縁部文様帯より独立させた。この他、文様帯内には文様要素横位充填、文様モチーフの展開により文様帯内を区画、沈線により柱状区画等が見られ、各々区別した（図23）。

(9) 前述した様に、八群土器には前期に伴うものが含まれるが、半粗製土器とした八群一類土器は、部分的にみられる文様要素より八辺七群土器に伴うことは確実である。特に八群一類b・c種は小突起、隆線の形状より七群六類に伴うものと思われる。

(10) 別稿において特に、一・二の点について論じたが、刊

行の順は逆となり、資料報告を主とする本稿が後出となつた。小林謙一、一九八八「東関東地方縄文時代中期初頭土器群の様相―「八辺式」の提唱とその編年的位置づけ」『村上徹君追悼論文集』

参考文献

赤星直忠 一九七四 『横浜市室ノ木遺跡』横須賀考古学会  
安藤文一 一九七七 『粟島台式土器の設定―東関東における縄文前期終末の様相―』『房総文化』

今井康博 一九七四 『東方第7遺跡』『港北ニュータウン地域内文化財調査報告』IV

今村啓爾 一九七二 『宮の原貝塚』武蔵野美術大学考古学研究会

一九八五 「五領ヶ台式土器の編年―その細分および東北地方との関係を中心に―」『考古学研究室研究紀要』第四号 東京大学文学部

岩橋陽一他 一九八四 「No.740遺跡」『多摩ニュータウン遺跡―昭和五十八年度』第七分冊

江坂輝彌 一九四九 「相模五領ヶ台貝塚調査報告」『考古学集刊』第三冊

江森正義・岡田茂弘他 一九五〇 「千葉県香取郡下小野貝塚発掘調査報告」『考古学雑誌』三六卷 三号

大川清他 一九七八 『茨城県美浦村虚空蔵貝塚』国士館大学

小林深志他 一九八三 「No.676遺跡」『多摩ニュータウン遺跡―昭和五十七年度』第四分冊

小林謙一 一九八四 「中部・関東地方における勝坂式・阿玉台式土器群成立期の様相」『神奈川考古』一九

一九八六 「中部・西関東地方における縄文時代前期末葉―中初期頭段階の土器について」『小黒坂南遺跡群』佐々木藤雄編

重久淳一・広瀬雄一他 一九八六 『奈良地区遺跡群』I  
清水潤三 一九五八 「千葉県栗山川溪谷における貝塚の地域的研究(予察)」『史学』三一巻一―四号

鈴木公雄 一九八二 『八日市場市史』  
西村正衛 一九五四 「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚(第二・三次調査)」『学術研究』三号

一九七七 「茨城県稲敷郡興津貝塚(第二次調査)―東部関東における縄文前期後半の文化研究(その四)」『学術研究』第二六号

橋本勝雄 一九八六 「特殊な篋状石器についての一考察(その二)―「段間型篋状石器」再考

―『太平台史窓』第五号

松村恵司 一九七四 「縄文時代中期初頭土器研究史―五領

ヶ台式系土器群の編年研究をめぐって

―『史館』三

山口 明 一九七八 「縄文時代中期初頭土器群の分類と編

年―関東・中部地方を中心として」『駿

台史学』四三号

一九八〇 「縄文時代中期初頭土器群における型

式の実態」『静岡県考古学会シンポジウ

ム』四

山内清男 一九三七 「縄文土器型式の細別と大別」『先史

考古学一巻一号』

(追記)

脱稿後、清水潤三先生の訃報に接した。先生の霞ヶ浦九十  
九里沿岸の考古学的調査には目ざましいものがある。今回扱  
かった八辺貝塚の他、茨城県宮平貝塚、千葉県染井貝塚、加  
茂遺跡に於ても、前期末葉～中期初頭の良好な資料があり、  
東関東地方の土器様相を探る上で不可欠のものである。生前  
の先生の学恩に答えるためにも、今後とも再検討を行なって  
いきたい。

また「八辺式」設定については注(10)文献の他、拙稿一九  
八八「縄文時代中期勝坂・阿玉台式土器成立期におけるセツ

千葉県八日市場市八辺貝塚出土土器について

ルメント・システムの分析―地域文化成立過程の考古学的研  
究(2)―『神奈川考古』第24号に於ても補足している。  
併せて参照して頂ければ幸いである。